

谷川・池田・池ノ上遺跡

大野城市文化財調査報告書

— 第 51 集 —

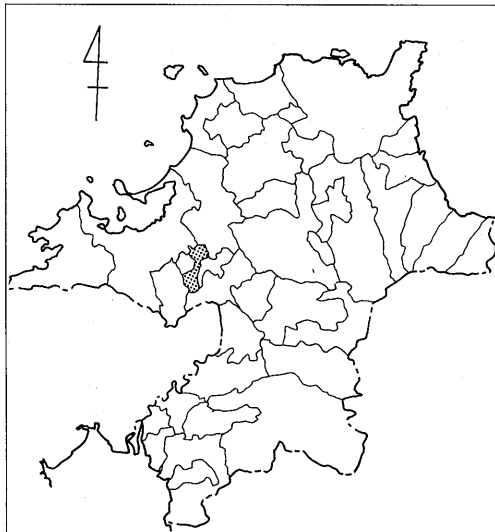
1998

大 野 城 市 教 育 委 員 会

谷川・池田・池ノ上遺跡

大野城市文化財調査報告書

— 第 51 集 —



1998

大 野 城 市 教 育 委 員 会



(1) 谷川遺跡



(2) 池田遺跡

序

大野城市は市名を古代の朝鮮式山城である大野城跡から取り、また市の南部には水城跡があるなど、大宰府と関連の深い市です。本市に隣接する太宰府市や春日市の近年の発掘調査で大宰府政庁の南からほぼ直線的に古代の迎賓館である鴻臚館まで続く官道の跡が見つかっています。両市の調査において見つかっていることから本市においても発見されることが予測されていましたが、谷川遺跡・池田遺跡の発掘調査によって、その地点に当たったようで、ほぼ推定されたライン上で見つかりました。10km以上も離れた地点を直線的に結ぶ古代の測量技術の水準の高さに驚かされます。

本報告書はその成果を載せたものです。発掘調査の成果が広く世に知られ、その成果がさまざまに活用されることになることを願っております。

最後に、発掘調査にご協力いただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成10年 3 月31日

大野城市教育委員会

教育長 堀 内 貞 夫

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が実施した谷川遺跡・池田遺跡・池ノ上遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 谷川遺跡は民間のマンション建設に伴って発掘調査を行ったもので、池田遺跡・池ノ上遺跡は街路築造に先立って発掘調査を実施したものである。このため、谷川遺跡を最初に報告し、次に池田遺跡・池ノ上遺跡をまとめて報告する。
3. 遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。
4. 遺物実測は西村晴香、丸尾博恵、製図は西村と河鍋洋子、拓本は井手美智子が担当した。
5. 遺物法量表は西村が担当した。
6. 本書中で出土遺物量を整理箱何箱と表現する時の箱の大きさは内法で40×61cm、深さ15cmである。
7. 本書の執筆・編集は谷川遺跡を舟山良一が、池田・池ノ上遺跡を徳本洋一が担当した。
8. 本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の2.5万分の1地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。

谷川遺跡

谷川遺跡本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の結果	4
1. 調査概要	4
2. 遺構と遺物	5
(1). 掘立柱建物	5
(2). 溝	5
(3). 土坑	15
(4). 不整形落ち込み	16
(5). その他の遺構と遺物	18
IV. まとめ	20

谷川遺跡巻頭カラー図版

1. 調査地全景

谷川遺跡表目次

1. 各遺構出土土器法量表 23

谷川遺跡図版目次

- 図版 1 (1)谷川遺跡調査地全景 (南東から)
(2)谷川遺跡調査地東半部 (南東から)
- 図版 2 (1)谷川遺跡SB01 (南東から)
(2)谷川遺跡SX02 (西から)
- 図版 3 (1)谷川遺跡SD01埋土断面 (北西から)
(2)谷川遺跡SD02埋土断面 (北西から)
- 図版 4 (1)谷川遺跡SD03埋土断面 (北西から)
(2)谷川遺跡SD03埋土断面 (北西から)

- 図版 5 (1)谷川遺跡SD03埋土断面(南東から)
 (2)谷川遺跡SD04埋土断面(南東から)
- 図版 6 谷川遺跡から見た水城跡(北西から)
- 図版 7 谷川遺跡出土遺物(土器)
- 図版 8 谷川遺跡出土遺物(土器)
- 図版 9 谷川遺跡出土遺物(土器)
- 図版10 谷川遺跡出土遺物(土器)
- 図版11 谷川遺跡出土遺物(土製品・石器・金属器)
- 図版12 谷川遺跡出土遺物(瓦)
- 図版13 谷川遺跡出土遺物(瓦)

谷 川 遺 跡 挿 図 目 次

第1図. 周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
第2図. 官道関連遺跡位置図(1/10,000)	折り込み
第3図. 谷川遺跡遺構配置図(1/200)	4
第4図. SB01実測図(1/40)	6
第5図. 調査区東南壁土層図(1/50)	7
第6図. SD01~03埋土断面図(1/40)	8
第7図. SD01・03・04出土土器実測図(1/3)	8
第8図. SD02出土土器実測図①(1/3)	9
第9図. SD02出土土器実測図②(1/3)	10
第10図. SD02出土土器実測図③(1/3)	11
第11図. SD02出土土製品実測図(1/3)	13
第12図. SD02・SX01出土瓦実測図・拓影(1/4)	14
第13図. SK02出土土器実測図(1/3)	16
第14図. SK01・02実測図(1/20)	17
第15図. SK03実測図(1/20)	18
第16図. SX01出土土器実測図(1/3)	18
第17図. SD04・SK02・SX01出土遺物実測図(1/2)	19
第18図. ピット出土土器実測図(1/3)	19

I. はじめに

大野城市下大利4丁目742-1は、大宰府から水城西門を通り鴻臚館へ続くいわゆる官道の通過地点と推定できる場所であったが、地権者はここを売却し、買い主はマンションの建設を計画することになった。このため、市教育委員会が試掘調査を実施したところ、溝状遺構とピットが検出された。そこで、教育委員会と開発側が協議したが、建設を変更することは不可能であったため、本調査を実施することになった。

調査面積は約400㎡、調査期間は1994年（平成6年）1月31日から3月7日までである。また、報告書作成のための整理作業は1997年（平成9年度）に行った。

調査は本市教育委員会が実施したが、整理作業まで数年度を要しているため、多くの職員が関わった。調査時と整理作業時の体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	久野 英彦
		堀内 貞夫
	教育部長	末増 治
		香野 信儀
	社会教育課長	關 隆明
		赤星 健彦
	社会教育課長補佐	中村 茂
	文化財担当係長	舟山 良一
	文化担当主査	浦山 敏弘
	主任技師	向 直也
		徳本 洋一
		石木 秀啓
	技師	丸尾 博恵
	嘱託	岸野 和子
		西村 晴香

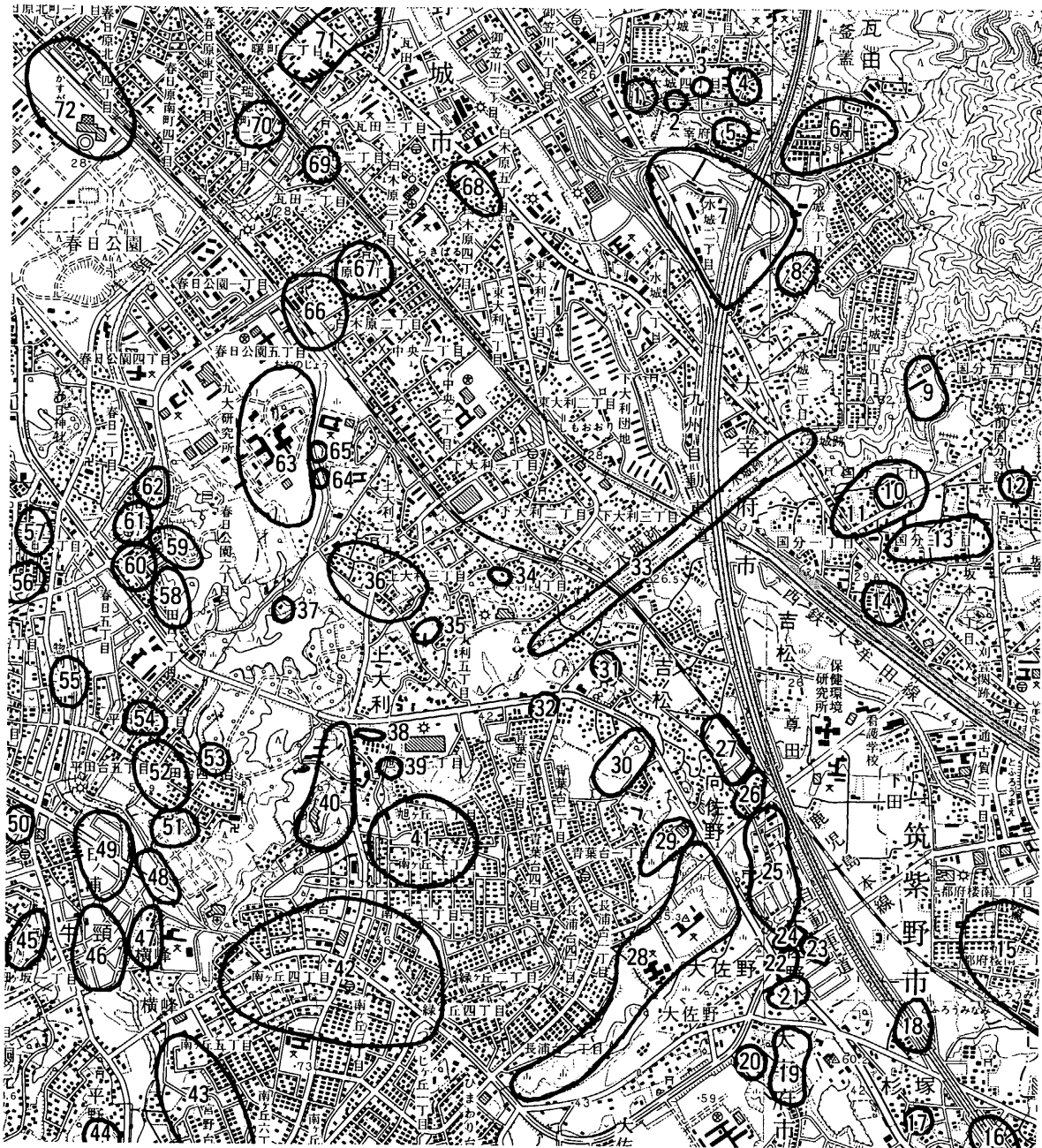
調査作業従事者

池田タツヨ、大海雅子、河野房子、川辺照子、川辺美喜子、木寺真理子、佐藤利恵子、篠原純子、島崎真知子、高木冨子、高木幸子、田中フミ子、中山チエ子、中山三千代、原田敬子、福岡麗子、藤島ミトシ、藤田和子、満富スエコ、山下洋子、吉嗣波津子。

整理作業従事者

井手美智子、鬼塚穂子、河鍋洋子、小林優美、町井裕子、松岡信子、松藤レイ子、有田朱美、渡辺直美。

最後に、発掘調査に際して調査費の負担のご協力をいただいた地権者松尾文夫氏、基準点測量のご協力をいただいた太宰府市教育委員会に厚く感謝いたします。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 金山遺跡 | 16. 唐人塚遺跡 | 31. 島本遺跡 | 46. 塚原遺跡群 | 61. 向谷西遺跡 |
| 2. 金山古墳 | 17. 塔原廃寺 | 32. 神ノ前窯跡 | 47. 屏風田遺跡 | 62. 向谷北遺跡 |
| 3. 深町古墳 | 18. 剣塚遺跡 | 33. 水城跡 | 48. 横峰遺跡 | 63. 九州大学構内遺跡 |
| 4. 曲目遺跡 | 19. 脇道遺跡 | 34. 谷川遺跡 | 49. 日ノ浦遺跡群 | 64. 池ノ上遺跡 |
| 5. 笹原古墳 | 20. 殿城戸遺跡 | 35. 出口遺跡 | 50. 塚原古墳群 | 65. 池田遺跡 |
| 6. 釜蓋原遺跡 | 21. 尾崎遺跡 | 36. 上園遺跡 | 51. 華無尾窯跡群 | 66. 御供田遺跡 |
| 7. 成屋形遺跡 | 22. フケ遺跡 | 37. 梅頭窯跡 | 52. 春日平田西遺跡 | 67. 後原遺跡 |
| 8. 裏ノ田遺跡 | 23. 雛川遺跡 | 38. 上大利小水城跡 | 53. 春日平田東窯跡 | 68. 原ノ畑遺跡 |
| 9. 陣ノ尾遺跡 | 24. 上川久保遺跡 | 39. 谷蟹窯跡群 | 54. 春日平田遺跡 | 69. 国分田遺跡 |
| 10. 筑前国分尼寺 | 25. 前田遺跡 | 40. 野添窯跡群 | 55. 円入遺跡 | 70. 瑞穂町遺跡 |
| 11. 松本遺跡 | 26. 久郎利遺跡 | 41. 大浦窯跡群 | 56. 惣利東遺跡 | 71. 石勺遺跡 |
| 12. 筑前国分寺 | 27. 原口遺跡 | 42. 平田窯跡群 | 57. 惣利北遺跡 | 72. 駿河遺跡 |
| 13. 千足遺跡 | 28. 宮ノ本遺跡 | 43. 中通遺跡群 | 58. 春日平田北遺跡 | |
| 14. 正尻遺跡 | 29. 長浦遺跡 | 44. 城ノ山窯跡群 | 59. 向谷古墳群 | |
| 15. 市ノ上遺跡 | 30. 篠振遺跡 | 45. 畑ヶ坂遺跡群 | 60. 向谷南遺跡 | |



第2図 官道関連遺跡位置図 (1/10,000)

II. 位置と環境

谷川遺跡は大野城市下大利4丁目に所在する。福岡県が1980年に作成した埋蔵文化財分布地図に掲載されているが、なかなか実態の判明しない遺跡であった。今回マンション建設に先立って実施した試掘調査によって遺構が確認され、その一端がわかってきた。調査地は西側の丘陵の裾部に立地するような状況にある。調査地西側の丘陵は独立丘陵状を呈するが、本来は南から延びる舌状の丘陵の先端部に当たるものと思われる。

さて、遺跡周辺の歴史的環境を顧みるに当たり、谷川遺跡では弥生時代の遺構と古代の官道跡と思われる遺構と平安時代後半頃の遺構が検出されていることから、主にそれらと関連する遺跡を中心にしたい。

周辺の遺跡を概観する時に最も近く、また注目すべき遺跡は水城跡である。南東250mで水城西門跡に当たる。水城についてはいうまでもないことであるが、白村江での敗戦の後、唐・新羅連合軍の侵攻を恐れて、西暦664年に築造したとされる。最大幅80m、高さ13～14m、長さ1.2kmの土塁と幅60m、深さ4mの濠からなる大遺構で、国の特別史跡に指定されている。また、水城跡と関連して注目される遺構として、大宰府から水城西門を通り、鴻臚館へ続く官道跡が上げられる。太宰府市の前田遺跡と島本遺跡で検出され、水城西門をほぼ直線で結ぶ。そして、今回報告する谷川遺跡へ続く。さらに、北側の春日市内で何箇所か官道と推定できる遺構が検出されている。ほとんど直線で結ばれるのは驚くべきことである。

さかのぼって弥生時代の遺跡を見ると、南西300mの位置には丘陵上に立地する出口遺跡があった。出土遺物が少なかったが中期の土坑が検出されている。出口遺跡の西側にある上園遺跡では時期不詳ながら住居跡らしき遺構が検出されている。さらにその西側にある九州大学キャンパス内遺跡では中期の筒型器台などが出土している。南東の太宰府市側に目を転じると、前期・後期の集落が検出された前田遺跡、後期の集落が見つかった尾崎遺跡、脇道遺跡、後期から古墳時代前期にかけての貯木施設が検出された雛川遺跡などがある。福岡平野南端部の山間地から平野へ出る丘陵の先端部に立地する状況にあると観察できる。

平安時代の遺跡は大宰府関連遺跡を除いてはそれほど見つからないが、前述の上園遺跡で当該期の井戸や溝が見ついている。また、上大利小水城跡北側でも溝や掘立柱建物が検出されている。

(参考文献)

『出口遺跡』大野城市教育委員会 1989

『上園遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会 1986

『上園遺跡Ⅱ』大野城市教育委員会 1987

『九州大学埋蔵文化財調査報告』(第一冊) 九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 1992

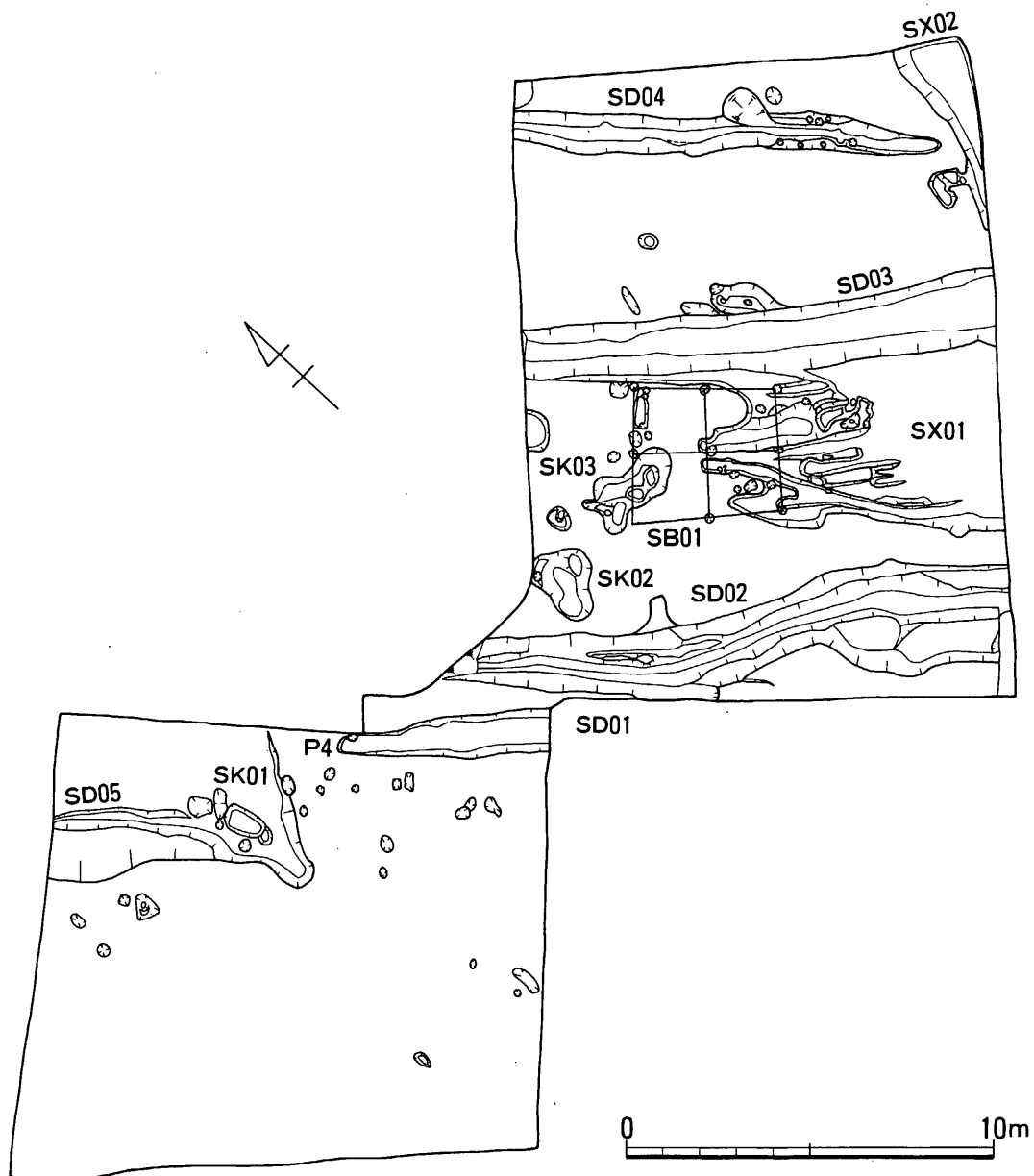
『小水城跡周辺遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会 1995

『大宰府・佐野地区遺跡群Ⅵ』太宰府市教育委員会 1996

III. 調査の結果

1. 調査概要

調査地は西南側が高く、北東側が低い。また、遺構面までの深さも西南側が浅く北東側が深い。そのせいか、西南側は遺構が削平されており、また調査前まであった建物の影響でかく乱が多かった。検出された遺構は溝5条、掘立柱建物1棟、土坑3基、不整形の落ち込み2、ピット約40、遺物は土師器が最も多く、弥生土器・須恵器そして黒色土器が少量、棒状土製品が少量、用途不明の



第3図 谷川遺跡遺構配置図(1/200)

青銅器 1、石鏃 1 である。全体の量として整理箱約 6 箱分である。

調査時の中央部分でほぼ平行して 4 条の溝が検出されたが、うち 2 条は古代官道の側溝の可能性が考えられる。調査地西南部で弥生土器の出土がやや多い。掘立柱建物は総柱建物と考えられる。

2. 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB01

調査区の中央より東側で検出されたものである。西側隅に当たるピットを 1 つ検出できなかったが、2 間×2 間の総柱建物と考えられる。各柱穴間の距離は第 4 図に示すとおり、必ずしも一定ではなく、また一直線でもない。柱穴の大きさは、径が 20～30cm、深さは 20～40cm である。

遺物は P3 から土師器の小破片が 2 片出土しただけで、遺物から建物の時期を決めることはできなかった。

(2) 溝

ほぼ北西～南東方向の溝を 5 条検出した。

SD01 (第 6 図、図版 3-(1))

調査区中央やや西寄りで検出されたものである。東南～北西方向に直線的に伸び、長さは約 5.8 m、幅は南東側で 1.2 m、北西端で約 0.4 m である。深さは南東側で 0.5～0.6 m であるが、北西へ行くにつれて底面の標高が上がり、北西端部では約 0.05 m となる。断面形は舟底状を呈し、埋土は褐色系の土が多い。

出土遺物 (第 7 図、1)

埋土中から少量の土器片、黒曜石片 5 片が出土した。土器は小片が多いが、弥生土器が主で、土師器らしきものが少量まざる。

弥生土器

甕 (1) 底部の小破片である。磨滅が激しく調整は不明である。胎土には白色砂粒を多く含む。

SD02 (第 6 図、図版 3-(2))

SD01 の東隣りで検出されたものである。ほぼ同じ方向に伸びるが、やや蛇行している。南東端が不明瞭だが、上端幅は約 1.5 m、下端幅 0.2 m で、底がやや平たい V 字状の断面を有する。深さは、70～90 cm で、南東側がやや低い。埋土は最下層が粘土層である。

出土遺物 (第 7～12 図、図版 7～13)

今回調査した遺構で最も多くの遺物の出土があり、その量は整理箱 5 箱分であった。土師器、棒状土製品が見られる。

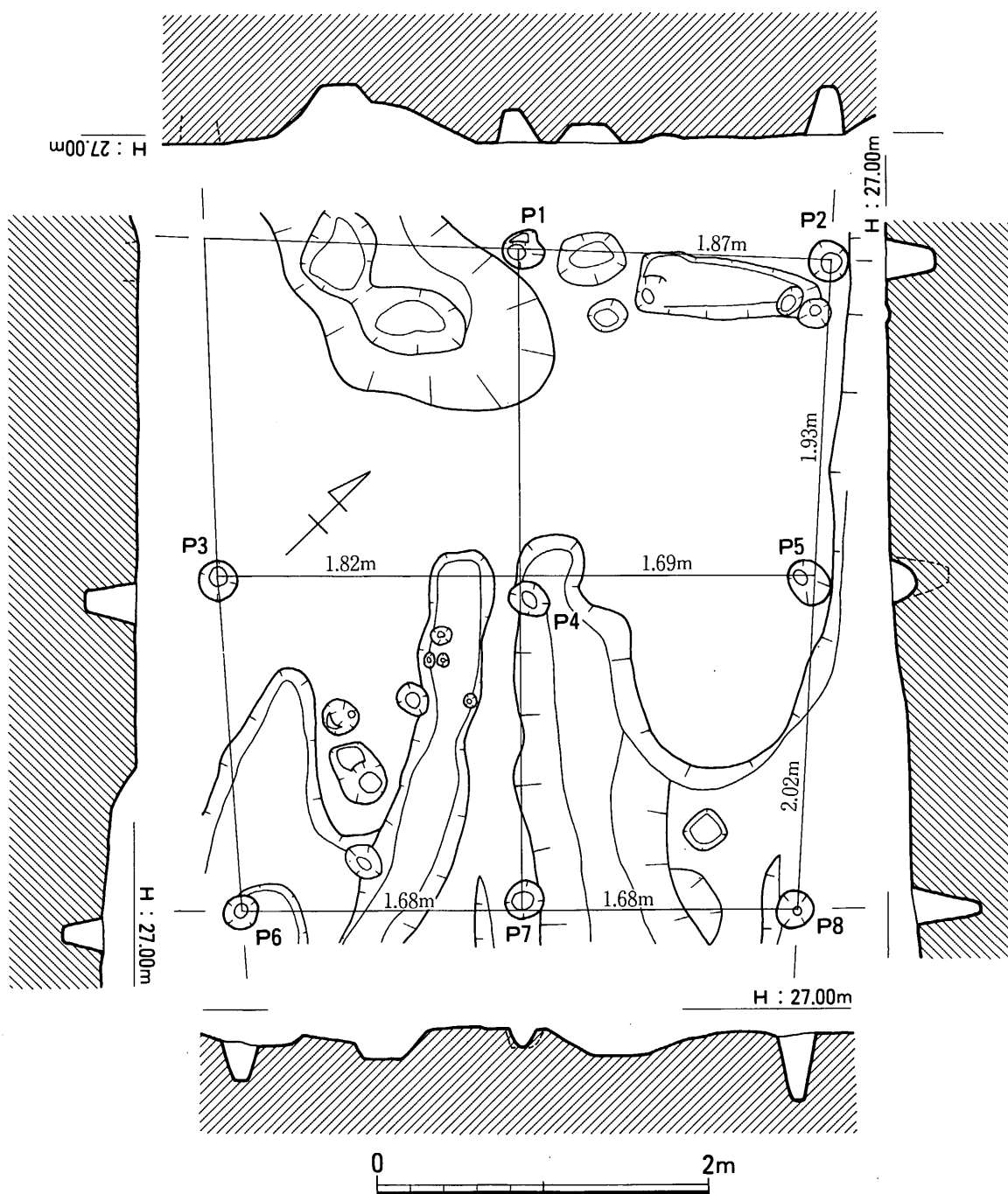
土師器

丸底杯 (11～47) 高台の付かないもの (11～36) と付くもの (37～47) がある。前者の場合、

個々の法量は法量表に示すとおりだが、口径は15.0～17.7cmである。80%が15.0～16.0cmに収まり、それより大きいのは32～36の5個である。器高は2.6～3.9cmであるが、3cmを越えるものが7割以上を占め、平均で3.34cmである。

全体に器面の荒れが目立ち、調整はわかりにくい、外面はナデ、内面はミガキが行われていると思われる。丸底にするために押し出す時に付くとされる指頭圧痕や、成形時に内面に付くとされるいわゆるコテ当て痕は観察しにくい。

高台が付く37～47については、口縁端部が外反する47がやや違う形態を示す以外は、ほぼ似た形



第4図 SB01実測図 (1/40)

態を持つ。口径はやはり47が17.4cmと大きい
が、他は14.6～16.4cmの大きさである。
15.4cmのものがやや多いが、平均すると
15.88cmとなる。

調整はやはり器面が荒れていてわかりにく
いものが多いが、残りの良いものは内面ミガ
キ、外面は粗いナデである。底部内面に粘土
紐を巻き上げた痕跡を留めるものもある。コ
テ当ては観察しにくい。

椀 (48～49) 丸底を呈するが、いわゆる丸
底杯に比べて深いものである。48は復元口径
14.2cm、器高5.0cmを測るものである。器面
の荒れのため調整は不詳である。49は焼けひ
ずみのため、上から見ると楕円形をしている。
推定口径は17.0cm、器高5.4cmを測る。調整
はナデのようであるが、やはり不詳である。

小皿 (50～52) 口径がそれぞれ9.0、9.4、
9.5cmの小皿である。51がやや深めであるが、
他の2つは浅い。52の口縁端部は図示しにく
いがややくぼむ。全体をナデているようだが、
荒れていて不詳である。

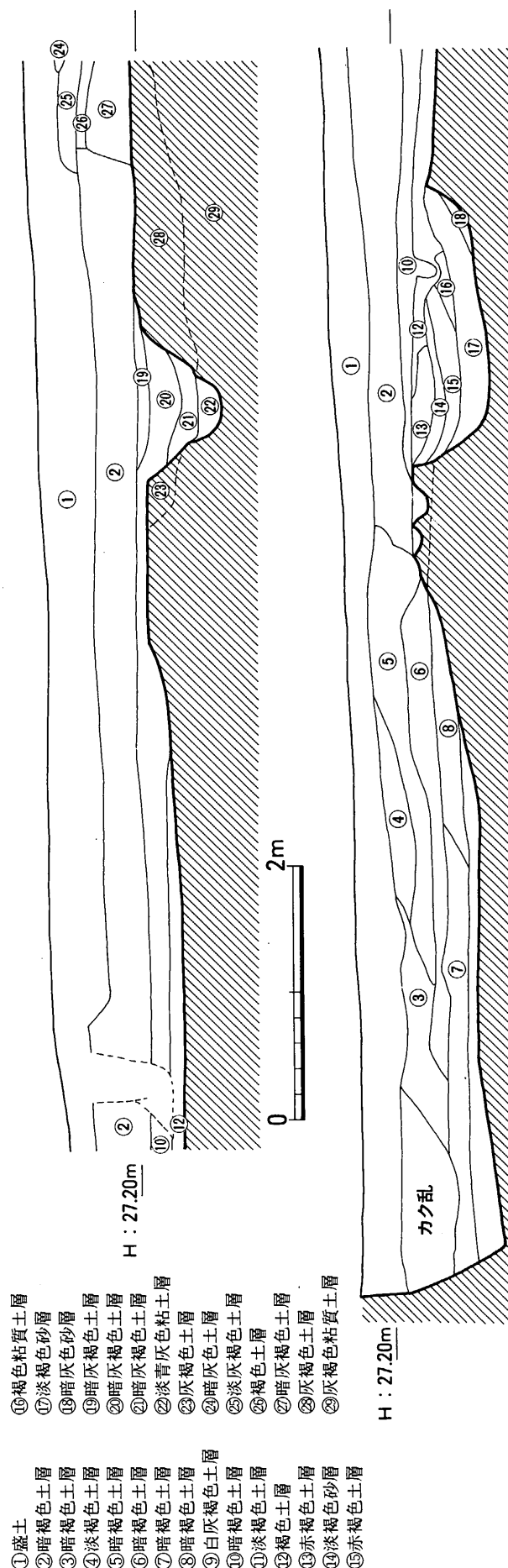
皿 (65) 当初須恵器と考えたものである。
淡黄灰色を呈し、調整が観察しにくい。

黒色土器

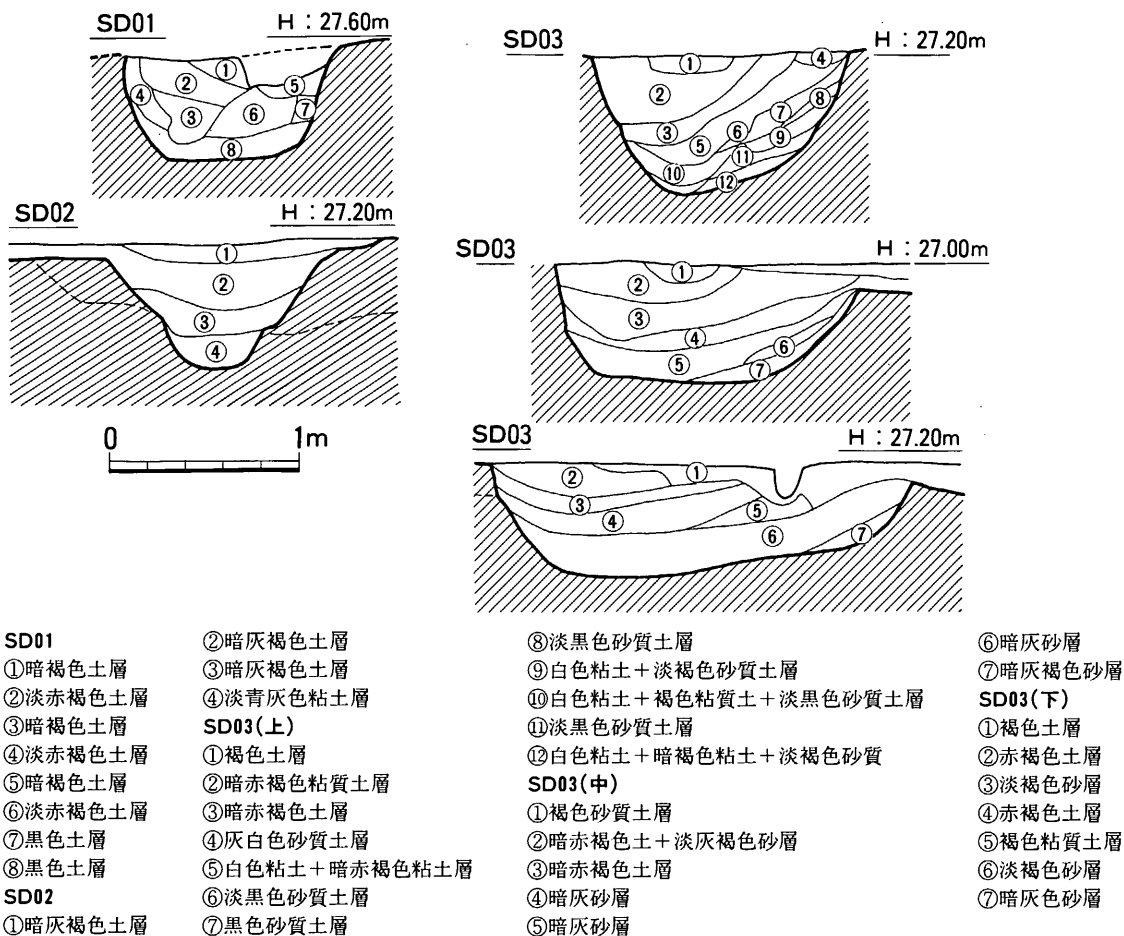
椀 (53・54) 54の外面は黒色化していない
部分もあるが、53は内外面ともに黒色化して
いる。53は小破片で高台の剥落した跡がある。
内外面ともにミガキを行っている。54も比較
的小破片である。内面はミガキの痕跡がある
が、外面はナデと思われる。

陶磁器

椀 (55) 極めて小破片の磁器である。低い
削り出し高台を持つもので、胎土は灰褐色を
呈し密である。内面にうすく半透明の釉がか
かる。



第5図 調査区東南壁土層図 (1/50)



第6図 SD01~03埋土断面図 (1/40)

須恵器

杯蓋 (56~60) 56

はかえりを持つもので天井部外面を回転ヘラケズリする。57

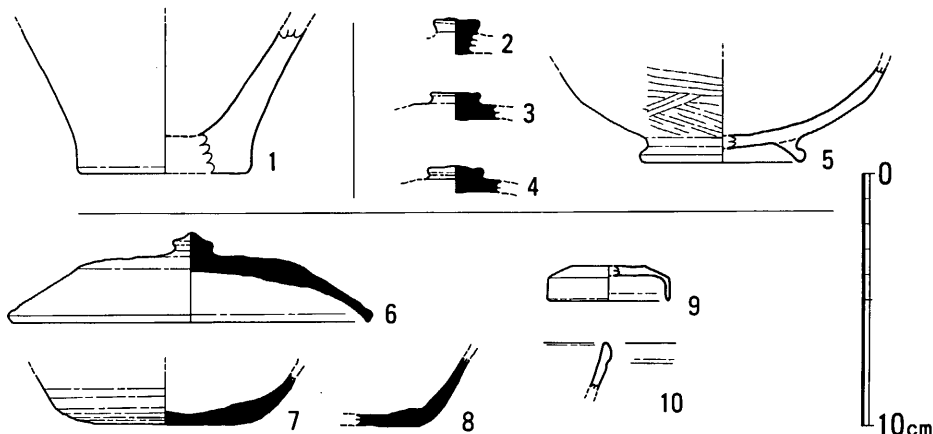
はかえりのないもので、天井部外面はヘラケズリしない。58

はつまみを含む小破片であるが、天井部

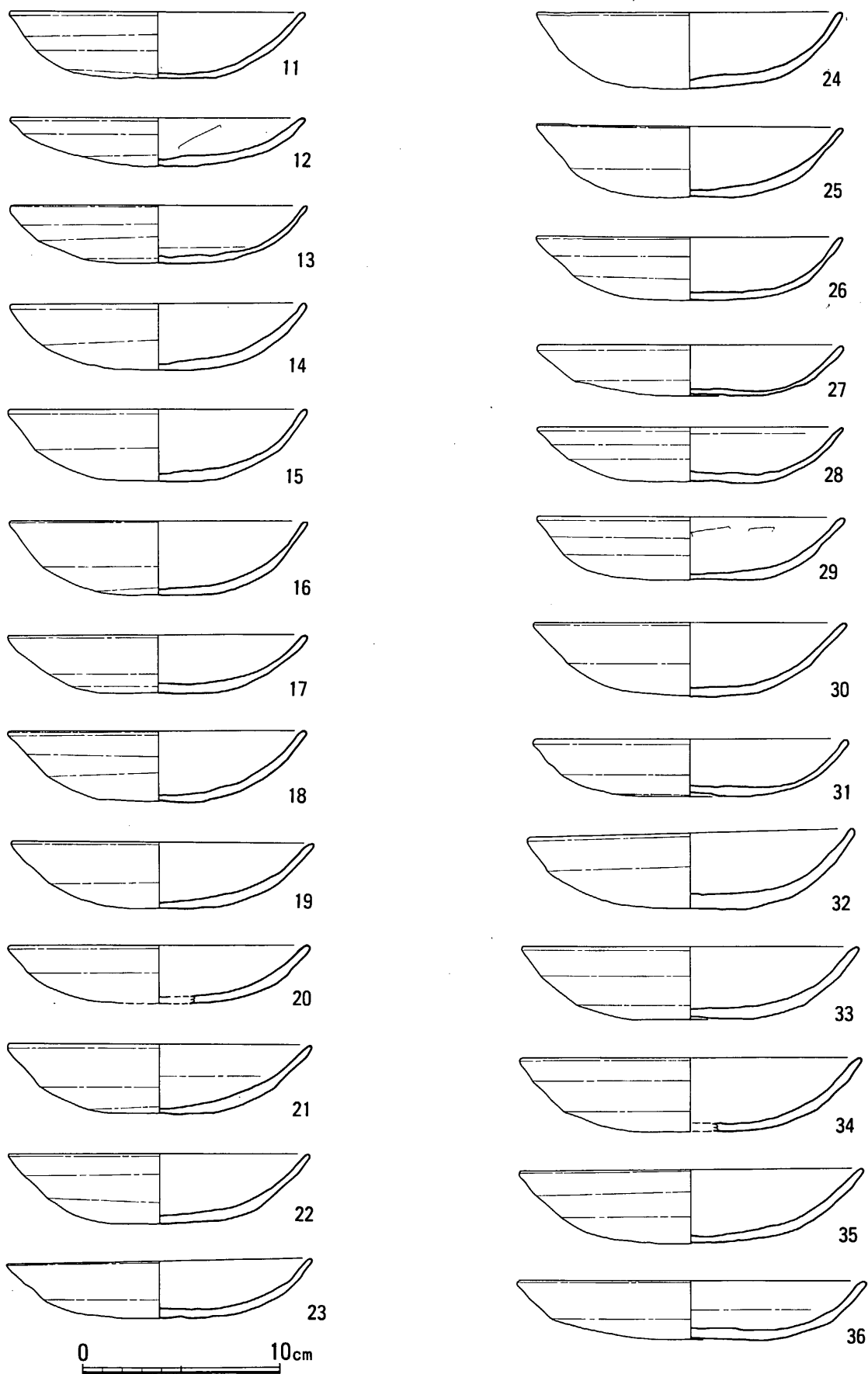
外面にカキ目状の条

線がある。59は焼けひずんでいるが、完形に近いものである。天井部は回転ヘラケズリしない。つまみは付いているがつまみにくい。60は小破片で、外面にやはりヘラケズリを行わないものである。口縁端部付近に平行条線がある。

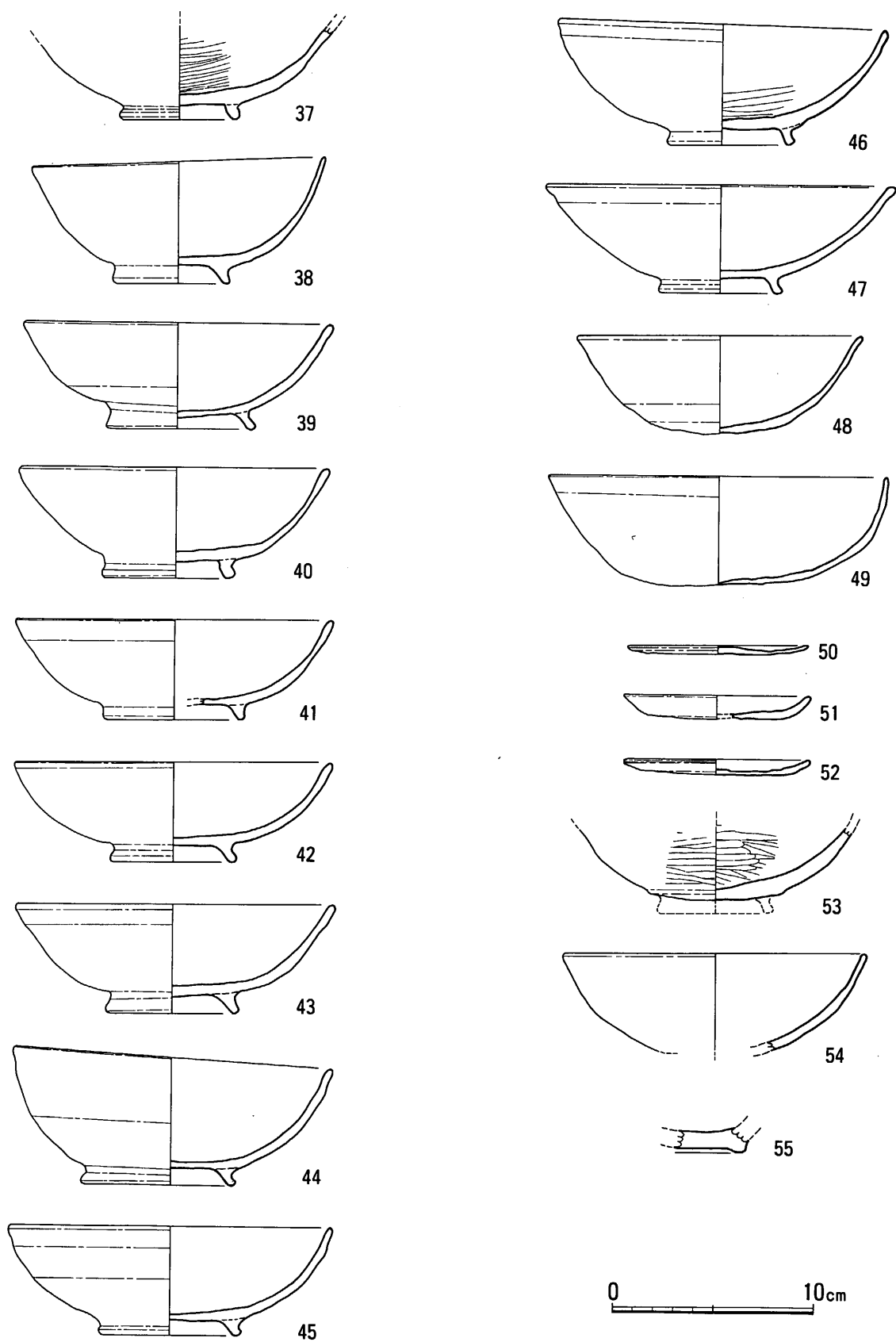
杯 (61~64) 高台の付くものと付かないものがある。高台は低い。底部はヘラ切り後ナデを行う。全体に回転ナデを行う。63は焼成不良で灰白色を呈する。



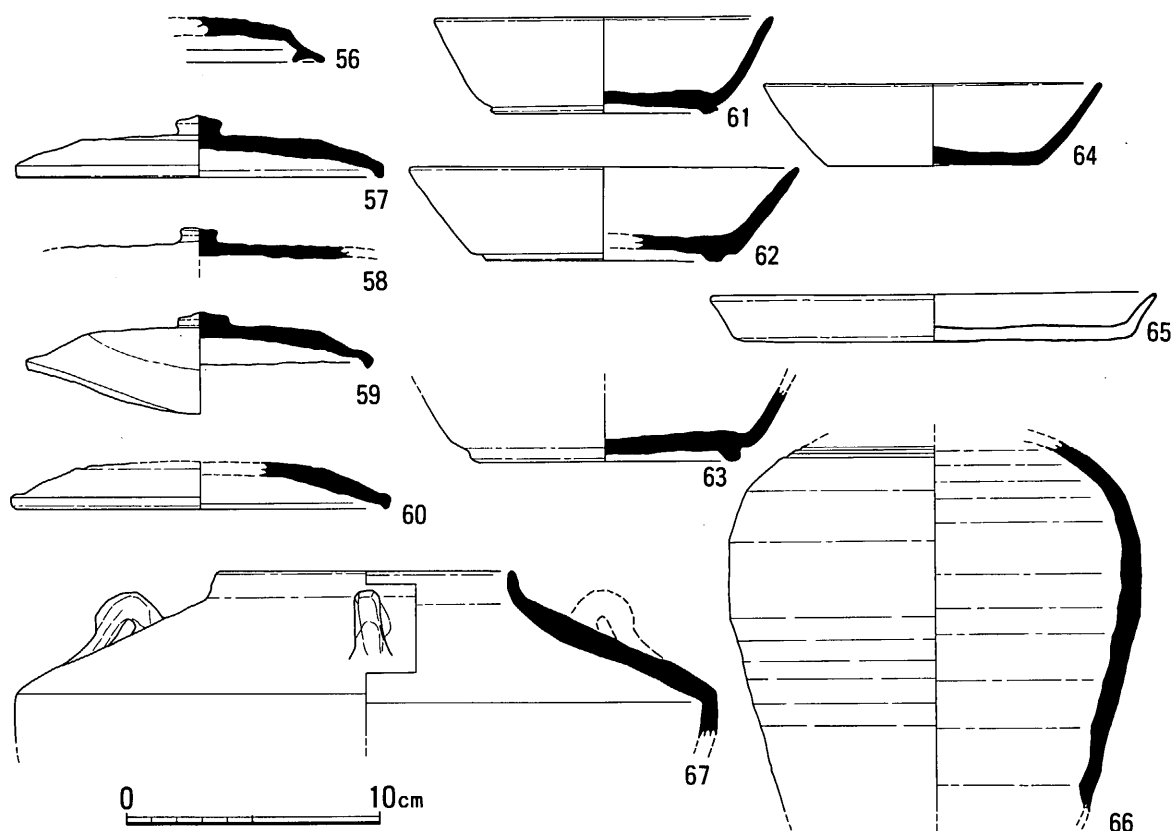
第7図 SD01・03・04出土土器実測図 (1/3)



第 8 図 SD02出土土器実測図① (1 / 3)



第9図 SD02出土土器実測図②(1/3)



第10図 SD02出土土器実測図③ (1/3)

瓶子 (66) 小破片で全容がわかりにくい。下端部が薄くなるのが気になる。外面は下半部がヘラケズリ、上半部が回転ナデである。

四耳壺 (67) 耳が2個残る破片であるが、耳の位置関係から四耳壺と考えたものである。全体に作りが良く、外面の稜から上部はうすい緑がかかった釉がかかる。

土製品 (第11図、図版11)

棒状土製品 (1～8) 断面は丸味のある方形または長方形を呈し、先端部が細まる形態の製品である。同一個体の可能性のあるものも含まれるが接合しないので別個のものとして図示した。胎土には大きめの粒子を含み、軟質の焼き上がりである。それぞれの最大幅と現存長を示すと、1は5.2cm、21.3cm、2は4.0cm、17.5cm、3は3.6cm、11.3cm、4は3.7cm、9.9cm、5は4.3cm、9.3cm、6は4.3cm、5.1cm、7は4.4cm、9.7cm、8は4.5cm、11.7cmである。地域によってヘラ状土製品と呼ばれたりするが、本市では小水城周辺遺跡について2例目となる。

器台状土製品 (9) 中心部に円孔のある土製品で、片側を欠く。細い棒に粘土を巻きつけたものか、成形の後に棒を通したのかはわからない。接地部径約10cm、現存高14.8cm、重さ約1.7kgを測る。胎土には大きめの石英状の粒子を比較的多く含む。

瓦 (第12図、図版12・13)

平瓦 (1～6) 1は凹面にわずかながら布目と模骨痕がある。凸面は縄目が付く。胎土はきめ細かいがやや焼きはあまい。両面黒色、内面灰黄白色である。2の凹面には布目が残るが、糸切りの

痕跡らしき、ゆるやかな弧を描く平行条線が入る。凸面は縄目の叩きである。側面はヘラケズリする。色調・胎土は1と同様である。3も同様な色調・胎土である。凹面には布目と幅3cmほどの模骨痕が残る。凸面は磨滅したものかなめらかである。4は全体的に灰黄白色を呈するもので磨滅が激しい。凹面にはわずかに布目が残る。5は2と似ているが、凹面に布目は観察できず、また平行条線も深い。6は4と似た色調である。凹面は磨滅して調整がわからないが、凸面には格子目叩きが残る。

SD03 (第6図、図版4・5)

SD02の東約6mに位置し、SD01、SD02とほぼ同方向に伸びる。わずかに湾曲するが、ほぼ直線的である。検出された長さは約13m、幅は北西側で約1.4m、南東側で約2.0mである。断面は平坦に近い底面を持つ半球形状とでも言うべき形をなし、最深部で0.75mを測るがおおむね0.6mを深さとする。底面のレベルはやや凹凸があるが、基本的に南側が低い。埋土は褐色系の土が多い。

出土遺物 (第7図、2～5)

ビニール袋(38×26cm)2袋分が出土したが、須恵器と土師器がほぼ半分ぐらいずつで、弥生土器少量、黒曜石片とサヌカイト片が若干含まれる状況であった。

須恵器

蓋(2～4) いずれもつまみの部分だけの破片である。比較的径の小さい釦状のつまみである。灰青色を呈し、焼成良好のものである。

土師器

椀(5) 体部下半の破片である。高台は比較的高く、体部は丸い。体部外面にはミガキの痕跡が残る。内面もミガキと思われるが平滑にされており、痕跡が残らない。

SD04 (図版5-(2))

SD03の東約4～5mに位置し、やはり他の溝と似た方向に伸びる。ただし、底面と側面が他の溝に比べてあまりしっかりしておらず、埋土も比較的柔らかい。また南端部は切れる。上端幅0.8～1.1m、深さ約0.4mである。底面のレベルは北側が低い。

出土遺物 (第7図、6～10、図版7)

土師器と須恵器が少量、青磁の合子蓋の破片と白磁椀の破片、そして土錘が1個出土している。

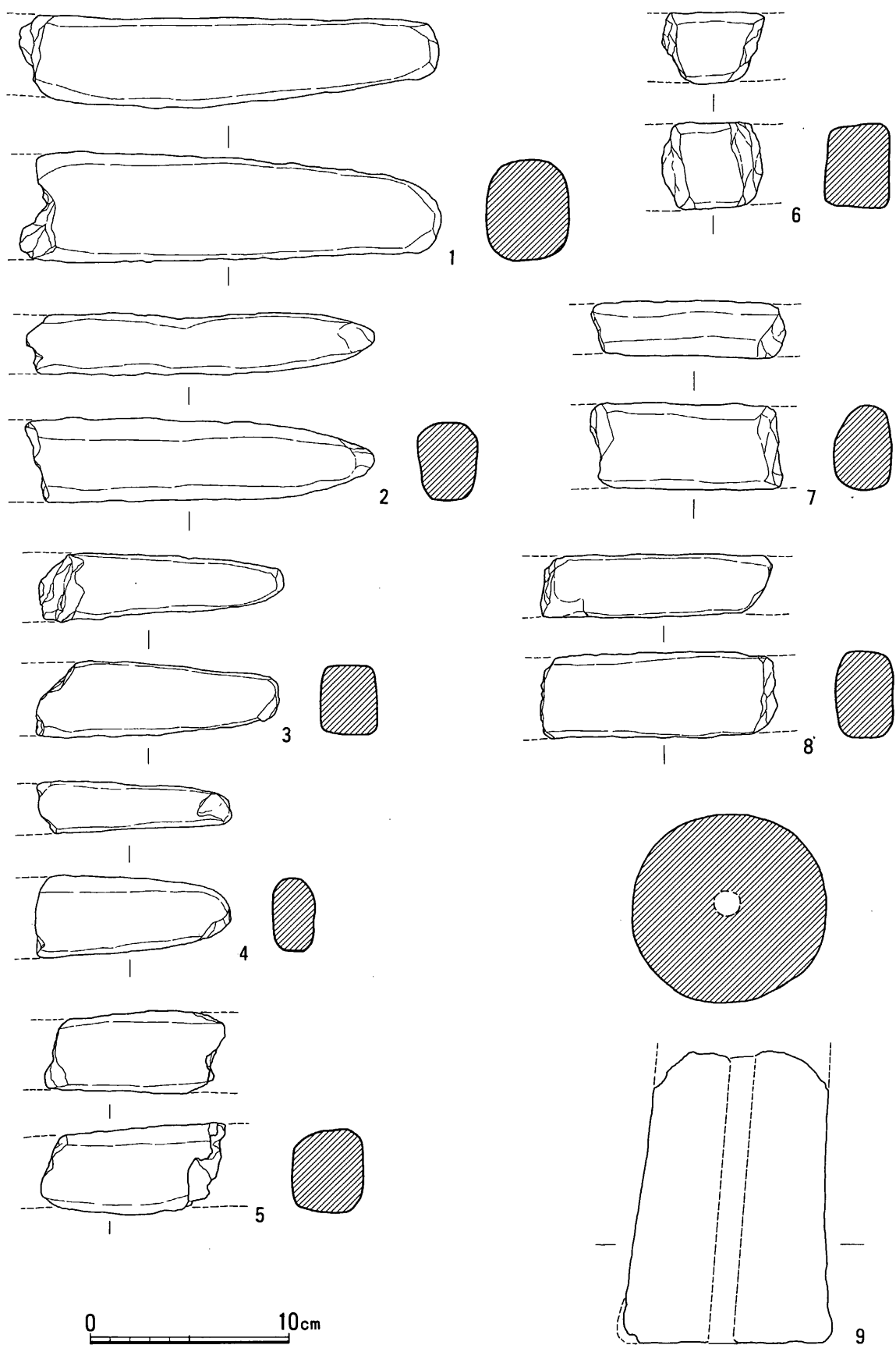
須恵器

杯蓋(6) 小破片である。宝珠様のつまみが付き、口縁端部をあまり折り返さないものである。天井部はヘラケズリしない。

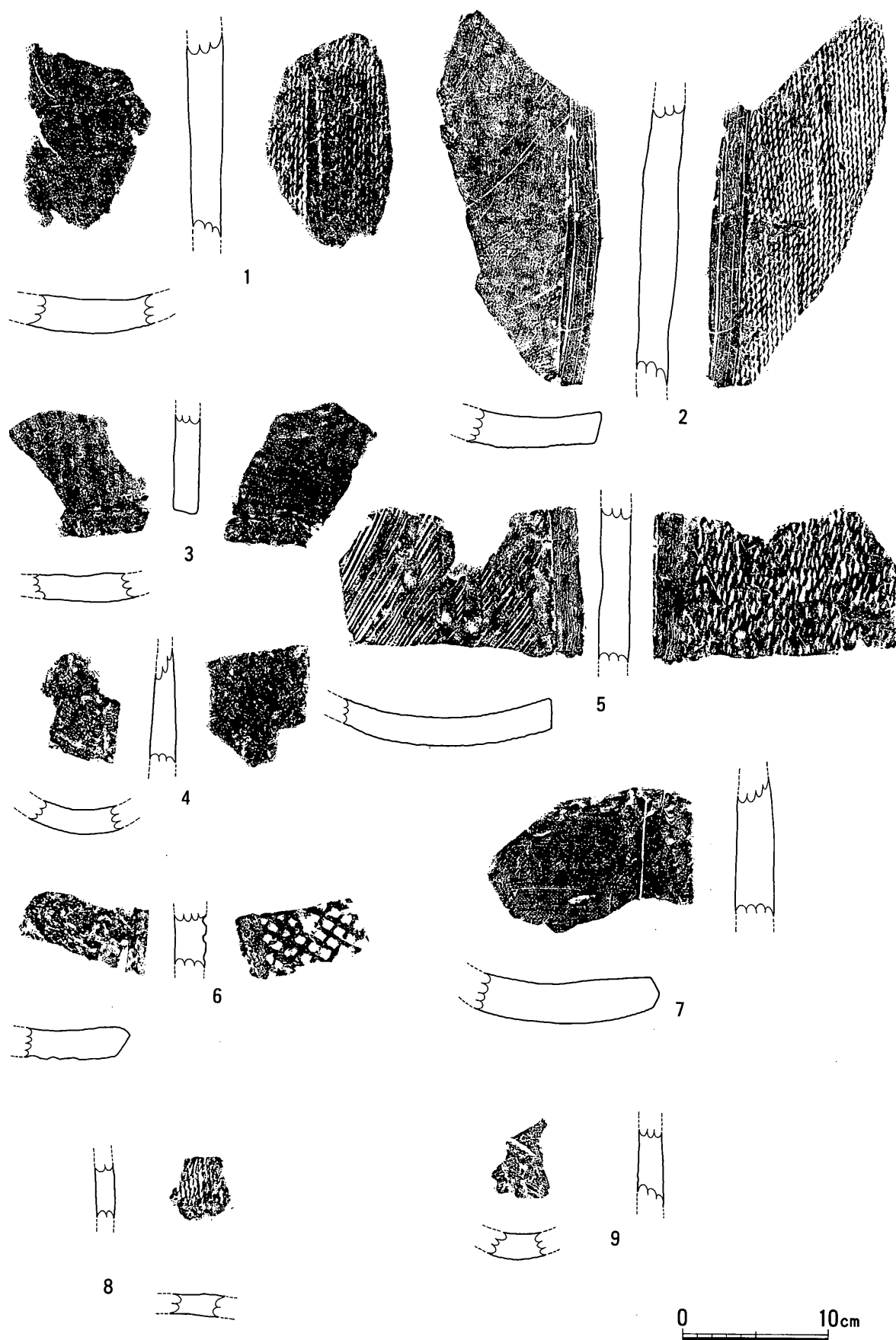
杯(7・8) 7は赤褐色を呈し、一見すると土師器に思えるものである。底部はヘラ切り後粗いナデを行う。体部内外面は回転ナデである。8は濃い灰色を呈する焼成良好な杯である。器面に小さい黒い斑点が多く見られる。底部はヘラ切りの後ナデを行っていると思われる。

磁器

合子蓋(9) 小破片である。うすい青色の釉が外面にかけられている。



第11図 SD02出土土製品実測図 (1/3)



第12図 SD02・SX01出土瓦実測図・拓影（1/4）

椀(10) 玉縁状の口縁を呈する白磁片で、乳灰色の素地に半透明の釉がかかる。

土製品(第17図)

土錘(1) 紡錘形のもので、長さ4.7cm、最大幅1.8cmを測る。一部欠くが重さは11.5gである。

SD05

SD01の北西5mに位置する。第3図の遺構配置図に示すように、大きな落ち込みの底部の一辺に添うように検出された溝である。従って、溝の上端は西側が高く、東側が低い。東側上端で底部のレベル差は2～3cmである。上端での幅は約50cmである。

出土遺物

土器の小破片3片が出土しただけである。須恵器片1、土師器片1、弥生土器か土師器かわからない軟質の土器片1である。小破片のため土器の所属年代は断定できなかった。

(3) 土坑

3基検出された。SK01はやや形状の整ったものだが、他の2基は不整形の土坑である。遺物は少ない。

SK01

調査区の西側で検出されたもので、片側がやや幅の広い楕円形を呈する。長軸長1.15m、短軸長0.55m、深さ約0.2mを測る。底部はおおむね平坦に近いがやや丸味を持つ。

出土遺物

粘土塊が3片出土しただけである。

SK02

SK01の東10mに位置し、SD02の北端部に近い。プランは不整形であるが、断面形は底部が比較的平坦で、壁面もほぼ直線的に立ち上がる。壁中位には段が2ヶ所にあり、1ヶ所には浅いピットがある。規模は最も長い部分で約2m、狭い部分で約1m、深さ約0.45mを測る。

出土遺物(第13・17図)

弥生土器、須恵器、石鏃、黒曜石片などが少量出土しているが、量的には弥生土器が多い。

弥生土器

壺(68) 口頸部の小破片である。口縁部は短く外反し、頸部との境はかるく段をなす。器面の荒れのため調整は不明である。

底部(69) 甕の底部ではないかと思われるが、小破片のため詳しいことはわからない。

須恵器

杯蓋(70) 小破片である。端部はかるく折り曲げる。回転ナデで仕上げる。

杯(71) これも小破片で、全体を回転ナデで仕上げる。

石器(第17図)

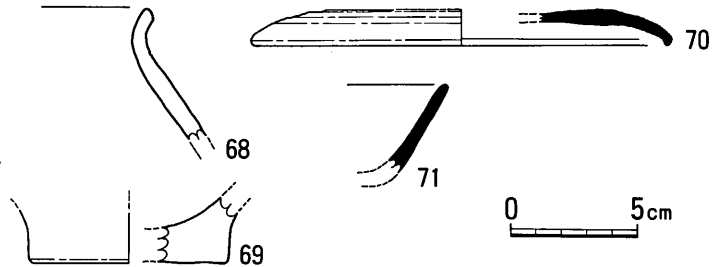
石鏃(3) 黒曜石製であるが、刃部の一部を欠く。長さ1.9cm、基部最大幅1.4cm、重さ0.65gを測る。

SK03

SK02の東1 mに位置する。不整形で、土坑の集合かとも思われる状況である。最も長い部分で2.8m、狭い部分で0.9m、深さは0.25～0.35mを測る。

出土遺物

弥生土器、土師器の小片がごく少量出土しただけである。図示できるものはなかった。



第13図 SK02出土土器実測図（1/3）

(4) 不整形落ち込み

調査区の東側で検出されたやや規模が大きく不整形の落ち込みをSX01、02とした。

SX01

SD02とSD03の間に位置する。南東部が発掘区外に出るため全容は不明である。北西側に小溝が多い。SD03と平行方向で約8.5m、直角方向で約5mを測るが、深さは0.2mと浅い。埋土最下層はSD03の上層に重なってきており、SX01がSD03より新しいことを示している。

出土遺物（第12・16・17図、図版11・13）

整理箱で1箱分ほどの遺物が出土している。土師器、須恵器、瓦であるが、1点用途不明の青銅器がまざる。

土師器

丸底杯（72・73） 72は高台が付くが、73は破片のためわからない。72の内面はミがいている。73は器面が荒れていて、調整不明である。

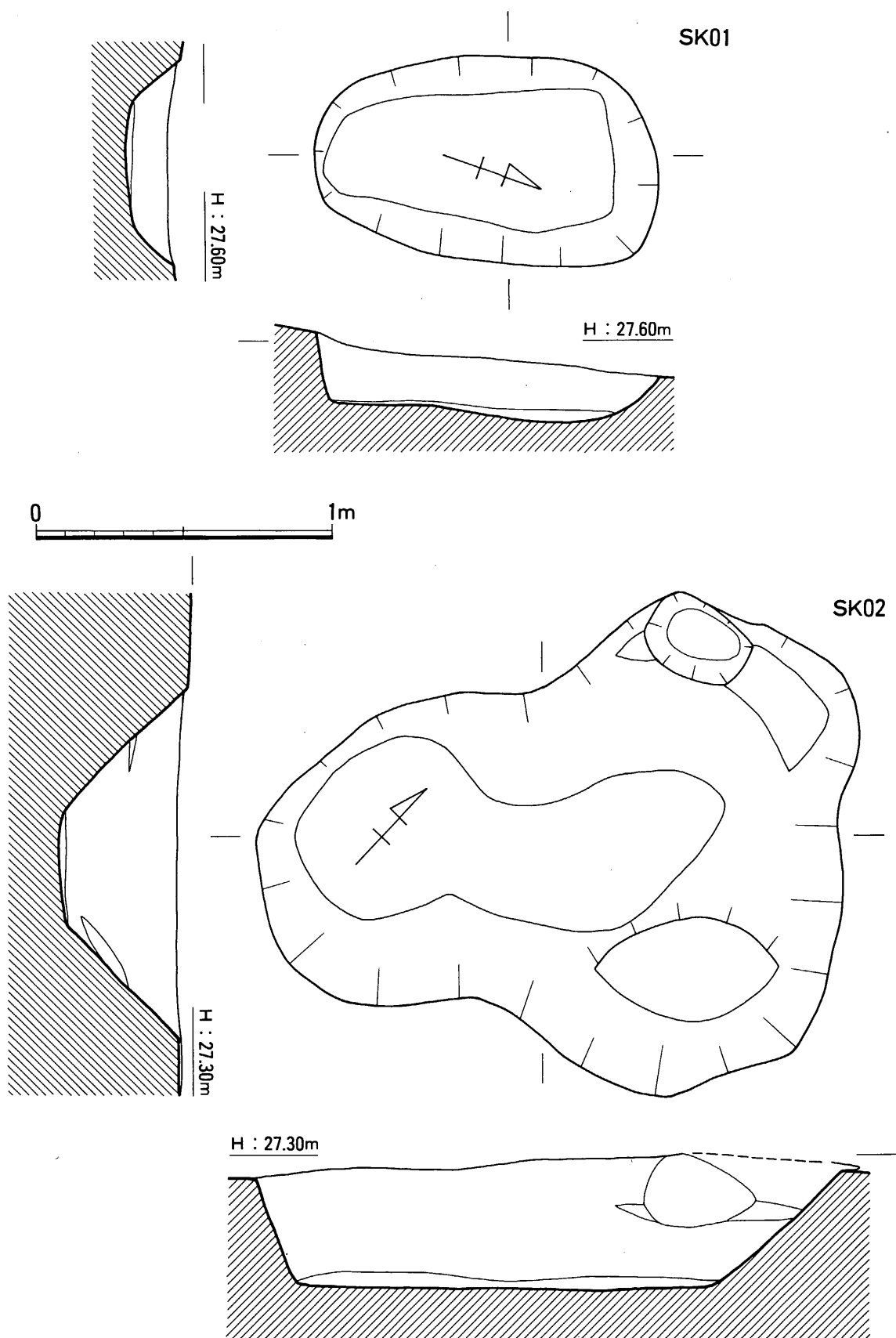
用途不明青銅製品（第17図、図版11） 断面七角形をした筒状のもので、両端を欠く。現存長4.1cm、径1.2cm、厚さ約1mmを測る。用途はわからない。

瓦（第12図、図版13）

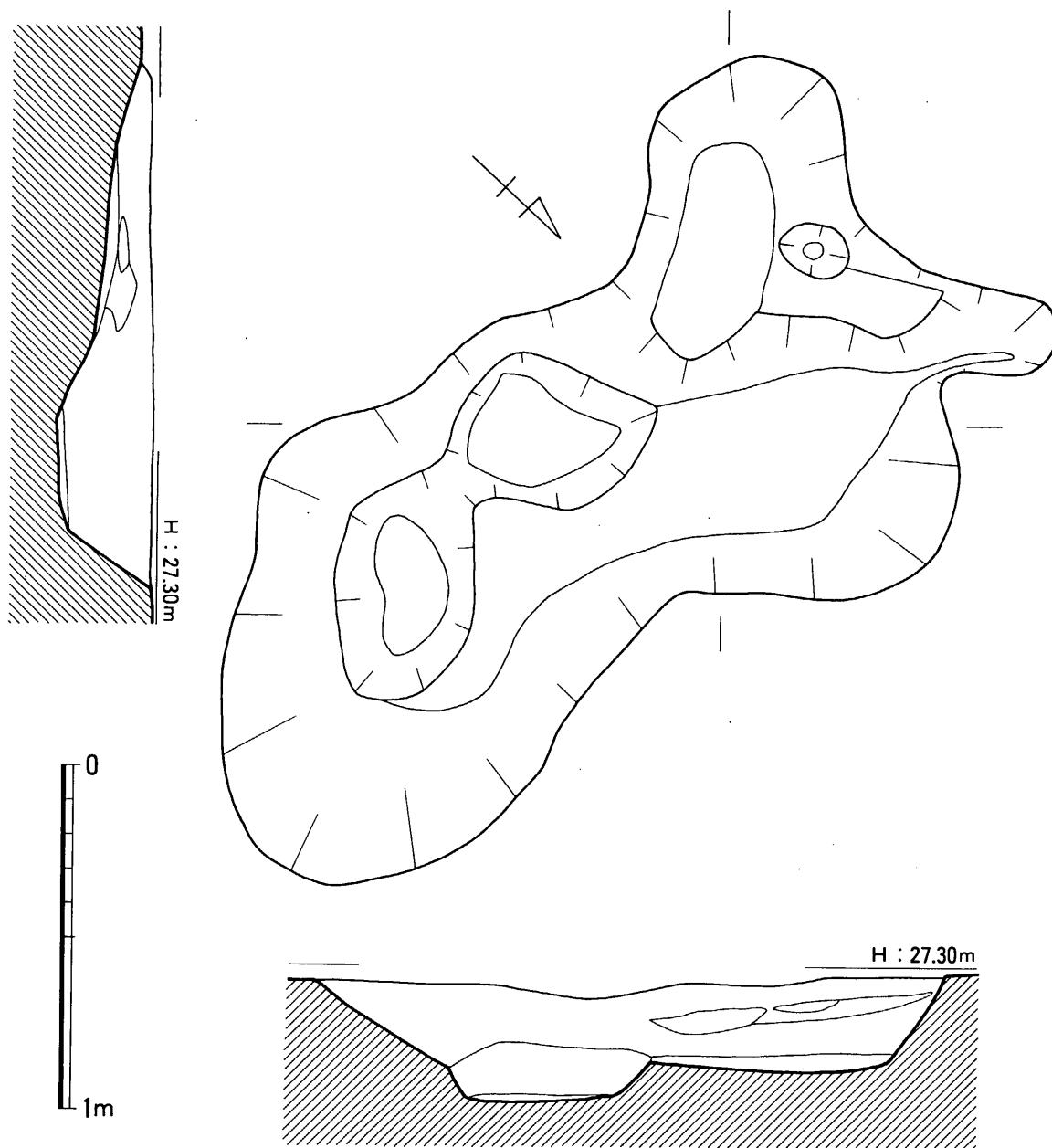
平瓦（7～9） 7は凹面に布目痕が残るが、凸面はなめらかにされている。また、側面の断面が山形になる特徴を持つ。また、凸面の中央部に水平方向に段となる部分があって、色調が違っている。あるいは重ね焼きした時生じたものかもしれない。色調は凹面が黒色、凸面が灰色を呈する。8は小破片で凸面に縄目の叩きを持つものである。凹面は磨滅のため良くわからない。9は須恵質に近いもので、凹面には布目と思われる痕跡があり、凸面はなめらかに作られているものである。断面を見ると種類の違った粘土が波状に入れられている。

SX02

発掘区の東隅で検出されたもので、全容は不明である。最深部で約0.55mであるが、おおよそ0.4mの深さである。



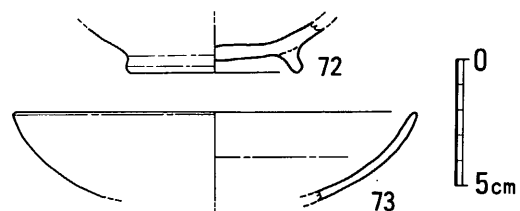
第14図 SK01・02実測図 (1 / 20)



第15図 SK03実測図 (1/20)

出土遺物

少量出土しているが、土師器片が最も多く、須恵器、瓦質土器、磁器片がごく少量まざる。小片のため時期決定は難しい。



第16図 SX01出土土器実測図 (1/3)

(5) その他の遺構と遺物

ピット

掘立柱建物SB01以外にいくつかの小ピットが検出されている。並ばないため建物の想定はでき

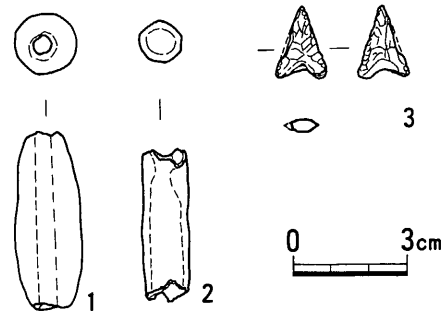
ないが、ピットからは弥生土器、土師器、須恵器、青磁片と思われるものなどが出土している。いずれも小破片であるが、図示できるものが若干含まれている。

出土遺物（第18図、図版10）

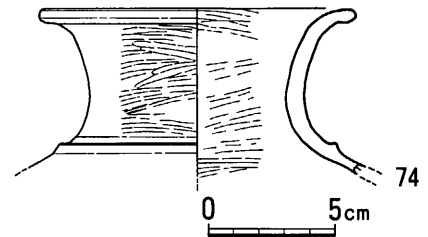
P4から弥生土器が出土した。

弥生土器

壺（74） 口頸部の破片である。外反する口縁部、頸部と胴部の境の凸帯が形態上の特徴である。口頸部は内外面をミガク。淡茶褐色を呈するものである。



第17図 SD04・SK02・SX01
出土遺物実測図（1/2）



第18図 ピット出土土器実測図
（1/3）

IV. まとめ

谷川遺跡の調査結果について報告したが、各遺構の時期と遺跡の性格について簡単にまとめてみたい。

1. 遺構の時期

SB01

本文で記したとおり、出土遺物からは決められない。しかし、不整形落ち込みSX01の埋土下で検出されたもので、それより古いことは確かである。後述するようにSX01は11世紀末～12世紀初頭頃と考えられるものである。

SD01

出土遺物は少量で、時期のわかるものは弥生土器である。土師器らしきものも少量まざる。この溝については、これも後述するが、奈良時代頃の官道の側溝と考えたい。

SD02

今回調査した遺構で最も多くの遺物が出土した遺構である。主に土師器だが、棒状土製品、須恵器も含まれる。丸底杯は口縁端部が外反せずに丸く終わるのが特徴である。口径は15.0～17.7cmで器高は2.6～3.9cmである。また、小皿は口径9.0～9.5cmのものである。これらは大宰府条坊の調査で検出された第46次調査SD1330に近い一群と考えられる。山本信夫氏の編年ではX II A期とされ、〈註1〉 おおよそ11世紀末～12世紀初頭頃と考えられる。〈註2〉

須恵器は8世紀後半頃の所産と考えられる。

SD03

土器は弥生土器、土師器、須恵器が出土している。最も新しい土器は土師器の碗で、外面にミガキの跡がある。山本氏編年のX I～X II期に相当するもので、11世紀中頃から12世紀初頭頃のものであろう。

SD04

白磁碗は小破片であるが、IV類に属し山本氏編年のC期（11世紀後半～12世紀前半）に分類される。〈註3〉 須恵器は杯蓋天井部外面をへラケズリしないことから8世紀後半に位置づけられる。

SD05

出土遺物が少なく、また、他の遺構との関係から見ても年代は決められない。

SK01

出土遺物が粘土塊のみで年代は決定できない。

SK02

弥生土器は小破片であるが、壺は前期のものと考えられる。須恵器は8世紀後半のものと思われる。遺構の年代は8世紀後半以後としか言えない状況である。

SK03

出土遺物が少なく、確定的なことは言えない。

SX01

出土した丸底杯から山本氏編年のX II期、11世紀末～12世紀初頭頃が考えられる。埋土の堆積状態からSD03より新しい。

SX02

須恵器、瓦質土器、磁器片がごく少量出土しているが時期決定は難しい。

ピット

P4出土の弥生土器は頸部と胴部の境に凸帯を持つことから、中期初頭の城ノ越期に属するものと考えられる。

2. 遺跡の性格

各遺構の年代は土器に幅があってわかりにくい状況である。しかし、それぞれの出土状況を見ると、調査区の西側には弥生時代前期～中期の遺構があると見てよさそうである。

次に、奈良時代の須恵器が比較的出土しているが、地権者の話と西側に残る丘陵の状況から須恵器窯跡のあったことが想定でき、そこからの須恵器が多く流れ込んでいることが考えられる。SD02の状況などはそのことを示していると思われる。

さて、以下は出土遺物から見ればかなり大胆な推測になるが、近隣市の調査成果から、充分に可能性のあることとして取り上げたい。

SD01とSD03についてであるが、両者ともに断面がやや丸味をおびた舟底状、あるいはゆるい半球形状を呈すること、また、埋土に褐色系の土を含むなど似た様相を示している。さらに両者は平行して伸びており、その内法は約9m、心々距離で約10.5mである。これらは太宰府市や春日市で検出された官道の様相と良く似ている。官道は大宰府政庁の南から水城西門を通り、鴻臚館へ続くと考えられている。谷川遺跡のSD01とSD03はこの官道の側溝と考えると、まさに官道想定ラインにのる。^{〈註4〉}現在の地割りもほぼ合致しているのはその影響だろうか（図版6）。SD01からは弥生土器が出土しているのは流れ込みと見ても矛盾はない。SD03出土の須恵器はその時期を示すものか、かつてあったと思われる窯跡の遺物なのかは断定できない。官道は7世紀後半以降で8世紀後半以前と考えられている。SD03の最も新しい遺物は11世紀末～12世紀初頭頃のものであり、SD01とSD03の間にあるSD02とSX01の年代も同様と考えられるので、遅くてもその時期には道の用をなしていないことは確実である。^{〈註5〉}

以上の推測を含めて官道の推定ラインを第2図に示した。

〈註1〉『大宰府史跡－昭和52年度発掘調査概報－』九州歴史資料館 1978

〈註2〉山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』1988

〈註3〉横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978

〈註4〉山村信榮「大宰府周辺の道路状遺構」『古代交通研究』第2号 1993

〈註5〉 註4に同じ。

遺物法量表

No.	遺構	種類	器種	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③底径 ④高台径	No.	遺構	種類	器種	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③底径 ④高台径
1	SD01	弥生土器	甕	②(5.7) ③(6.8)	38	SD02	土師器	丸底杯	①(14.6) ②6.1 ④5.8
2	SD03	須恵器	杯蓋		39		"	"	①15.4 ②5.4 ④7.4
3		"	"		40		"	"	①15.5 ②5.6 ④6.6
4		"	"		41		"	"	①(15.8) ②5.0 ④(7.0)
5		土師器	碗	②(3.7) ③(6.6)	42		"	"	①(15.8) ②5.2 ④(6.2)
6	SD04	須恵器	杯蓋	①(14.2) ②3.5	43		"	"	①15.8 ②5.5 ④(6.6)
7		"	杯	②(1.8)	44		"	"	①(15.9) ②6.4 ④7.7
8		"	杯		45		"	"	①(16.2) ②5.4 ④(7.2)
9	SD02	白磁	合子の蓋	①(4.8) ②1.4	46		"	"	①(16.4) ②6.1 ④6.4
10		"	碗		47		"	"	①(17.4) ②5.4 ④(6.2)
11		土師器	丸底杯	①15.0 ②3.4	48		"	"	①(14.2) ②5.0
12		"	"	①(15.0) ②2.5	49		"	"	①17.0 ②5.4
13		"	"	①15.0 ②2.9	50		"	小皿	①(9.0) ②0.5 ③(7.2)
14		"	"	①15.0 ②3.4	51		"	"	①9.4 ②1.2 ③6.8
15		"	"	①15.2 ②3.7	52		"	"	①9.5 ②0.8 ③7.0
16		"	"	①15.2 ②3.8	53		黒色土器	碗	③4.3 ④(5.8)
17		"	"	①(15.2) ②3.0	54		"	"	①(15.2)
18		"	"	①15.3 ②3.6	55		陶磁器	"	
19		"	"	①15.4 ②3.3	56		須恵器	杯蓋	
20		"	"	①(15.4)	57		"	"	①(14.6) ②2.5
21		"	"	①15.4 ②3.5	58		"	"	
22		"	"	①15.4 ②3.6	59		"	"	①(13.8) ②2.3~4.0
23		"	"	①(15.5) ②2.9	60		"	"	①(15.0) ②(1.9)
24		"	"	①(15.6) ②3.8	61		"	杯	①(13.4) ②4.8 ④(9.0)
25		"	"	①(15.6) ②3.6	62		"	"	①(15.4) ②3.7 ④(9.4)
26		"	"	①15.6 ②3.2	63		"	"	②(2.9) ④(10.8)
27		"	"	①(15.6) ②2.6	64		"	"	①(13.4) ②3.3 ④(8.2)
28		"	"	①(15.6) ②2.8	65		土師器	皿	①(17.6) ②1.9 ③(16.6)
29		"	"	①(15.8) ②3.2	66		須恵器	壺	
30		"	"	①(16.0) ②3.8	67		"	"	①(11.6)
31		"	"	①(16.0) ②3.0	68	SK02	弥生土器	甕	
32		"	"	①16.6 ②3.9	69		"	"	②(2.7) ③(8.0)
33		"	"	①(17.2) ②3.7	70		須恵器	杯蓋	①(16.6) ②(1.4)
34		"	"	①17.4 ②3.8	71		"	杯	
35		"	"	①(17.5) ②4.8	72	SX01	土師器	丸底杯	②(1.7) ④7.0
36		"	"	①(17.8) ②3.0	73		"	"	①(16.0)
37		"	"	②(4.6) ④(6.0)	74	Pit 4	弥生土器	壺	①(12.6)

() 内の数値は復元値を表す

池田・池ノ上遺跡

池田・池ノ上遺跡 本文目次

I. 調査に至る経緯	25
II. 調査の結果	26
III. まとめ	31

池田・池ノ上遺跡 巻頭カラー図版

1. 調査地全景

池田・池ノ上遺跡 図版目次

図版14	(1)池田遺跡全景（北西から）
	(2)池田遺跡盛土状遺構検出状況
図版15	(1)池田遺跡盛土状遺構土層断面
	(2)池田遺跡盛土状遺構土層断面
図版16	(1)池田遺跡盛土状遺構土層断面
	(2)池田遺跡盛土状遺構土層断面
図版17	(1)池田遺跡盛土状遺構土層断面
	(2)池田遺跡盛土状遺構土層断面
図版18	(1)池田遺跡盛土状遺構土層断面
	(2)池ノ上遺跡全景（南西から）
図版19	(1)池ノ上遺跡1号土坑
	(2)池ノ上遺跡2号土坑
図版20	池田・池ノ上遺跡出土遺物

池田・池ノ上遺跡 挿図目次

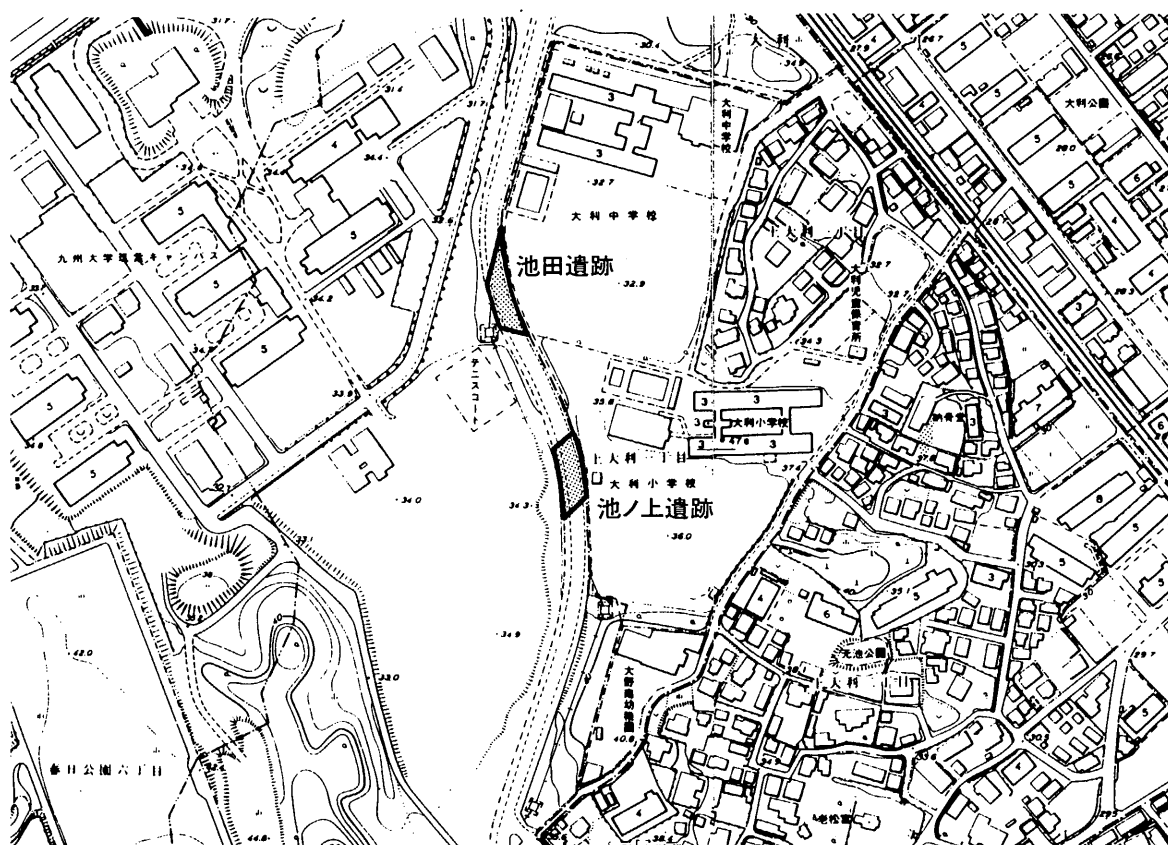
第19図	池田・池ノ上遺跡位置図（1/5,000）	25
第20図	池田遺跡遺構配図（1/200）	26
第21図	池田遺跡盛土状遺構土層断面図（1/60）	27
第22図	池ノ上遺跡遺構配置図（1/200）	28

第23図	池ノ上遺跡 1 号土坑実測図 (1 /20)	29
第24図	池ノ上遺跡 2 号土坑実測図 (1 /20)	30
第25図	池田遺跡出土遺物実測図 (1 /3)	31
第26図	池ノ上遺跡出土遺物実測図 (1 /3)	31

I. 調査に至る経緯

大野城市は、上大利地区における交通量の増加に対応するため、大野城市大字上大利からJR大野城駅西口に至る都市計画道路（春日原上大利線）を築造することとなった。大野城市教育委員会はこれをうけて、平成元年5月に全路線に渡っての試掘調査を行った。その結果、一ヶ所において盛土状遺構が検出されたほか、もう一ヶ所においても遺構の存在は確実であるとの結論に至った。これを受けて教育委員会、大野城市都市計画課（当時）、および土地の管理者たる大蔵省福岡財務支局の三者で協議を重ねたが、最終的に工事の施工前に本調査を行うこととなり、平成2年1月29日から同年3月26日にかけて実施した。当時の調査体制は以下の通りである。

大野城市教育委員会	教 育 長	久野 英彦
同	社 会 教 育 課 課 長	岡部弥之助
同	同 課長補佐	青木 克正
同	同 主 査	浦山 敏弘
同	同 同	舟山 良一
同	同 主任技師	向 直也
同	同	徳本 洋一
同	同 嘱 託	岸野 和子
同	同 同	下村 精一



第19図 池田・池ノ上遺跡位置図（1/5000）

なお、調査にあたって全面的なご協力をいただいた大蔵省福岡財務支局、大野城市都市計画課（当時）に対して心からお礼を申し上げる。また、九州大学総合理工学研究科には現場での作業に際し種々の便宜をはかっていただいた。ご迷惑をお詫びするとともに謝意を表したい。

II. 調査の結果

1. 調査概要

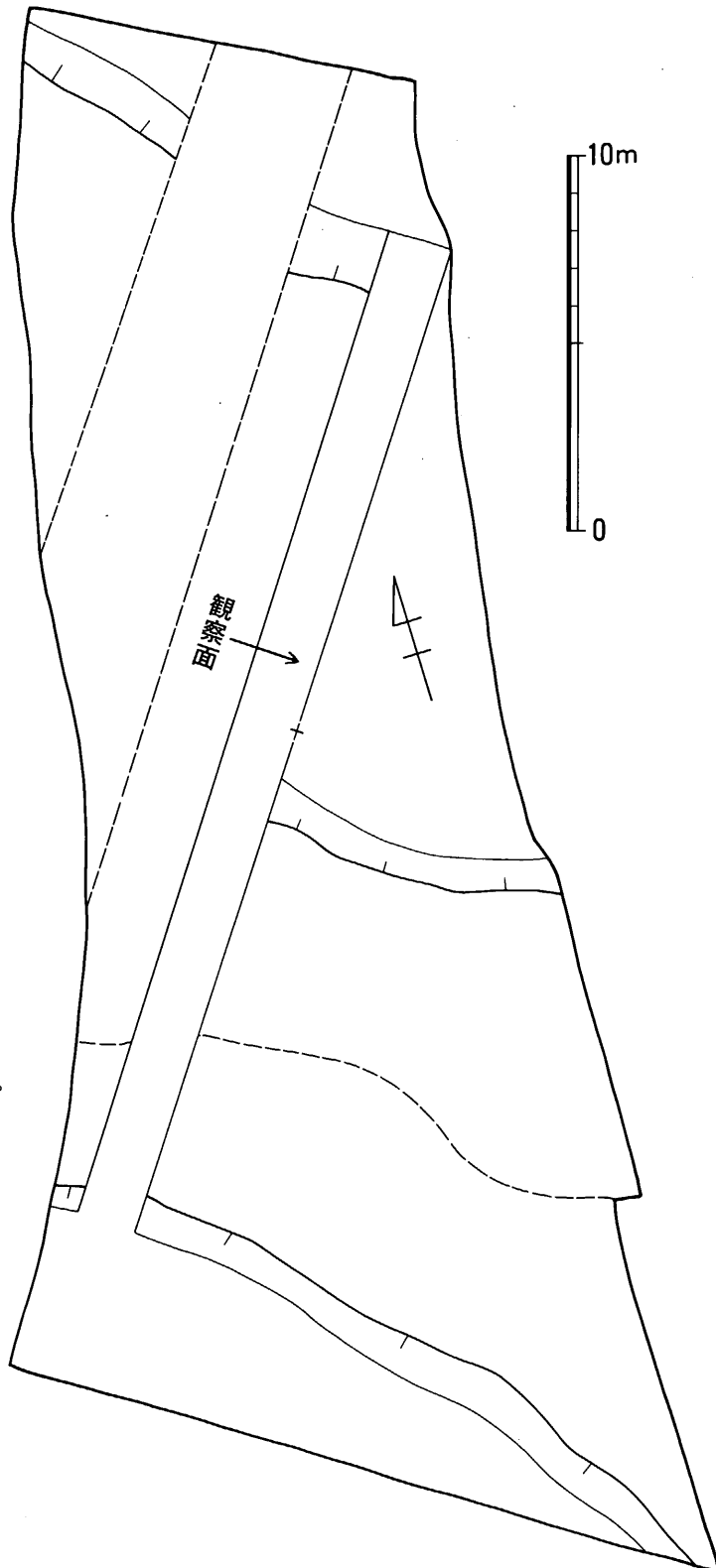
本調査は前述した通り2ヶ所について行ったが、両調査地点は直線距離で約80m離れている。小字名が「池田」と「池ノ上」と異なっているためこれをそのまま遺跡の名称とした（第19図）。以下池田遺跡から調査の結果を述べることにする。

1-（1）池田遺跡の検出遺構と遺物

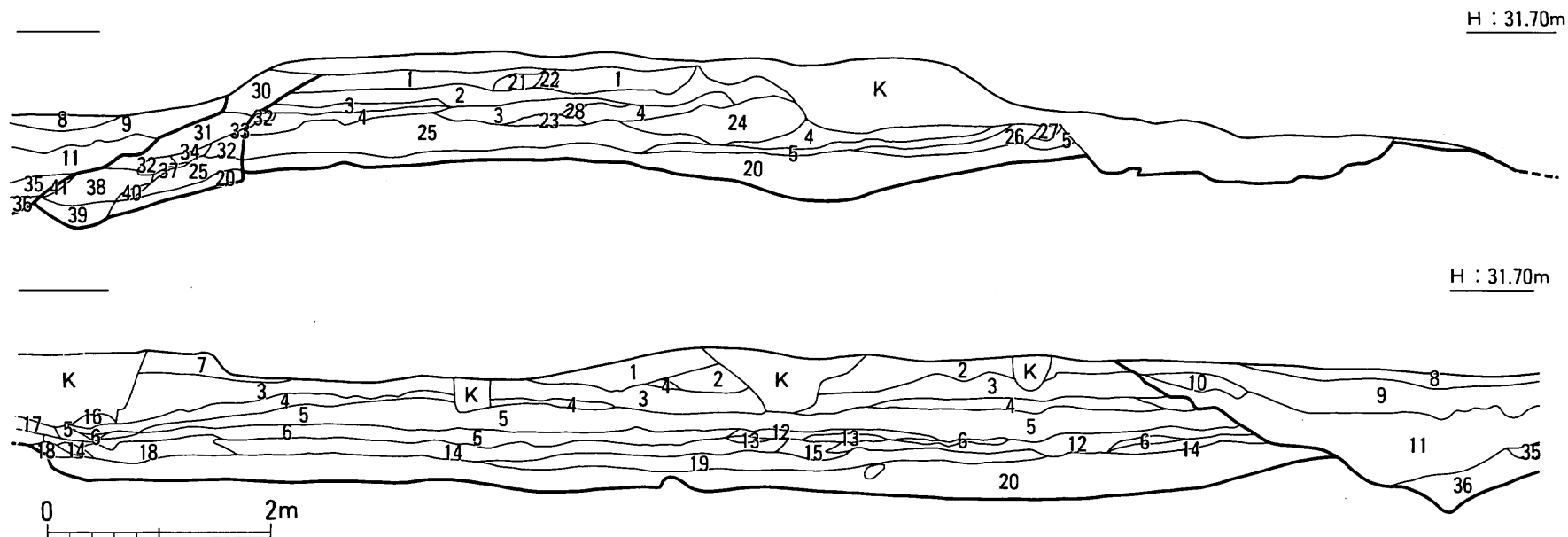
池田遺跡は大野城市大字上大利398-8他に所在し、調査面積は約500㎡である。試掘調査の段階で青灰色砂層をベースとする低湿地であることが分かっており、調査は最後まで湧水に悩まされた。標高は、このベースとなる青灰色砂層の上面で30m～31mほどである。この池田遺跡では盛土状遺構が検出された。

盛土状遺構（第20図、図版14～18-（1））

調査区のほぼ全面で検出され、台形を極端に引きのばしたような形状を呈する。基底部最大幅は約34mである。南東から北西方向へのびていたため、これと直行するトレンチを設定して盛土の状況等

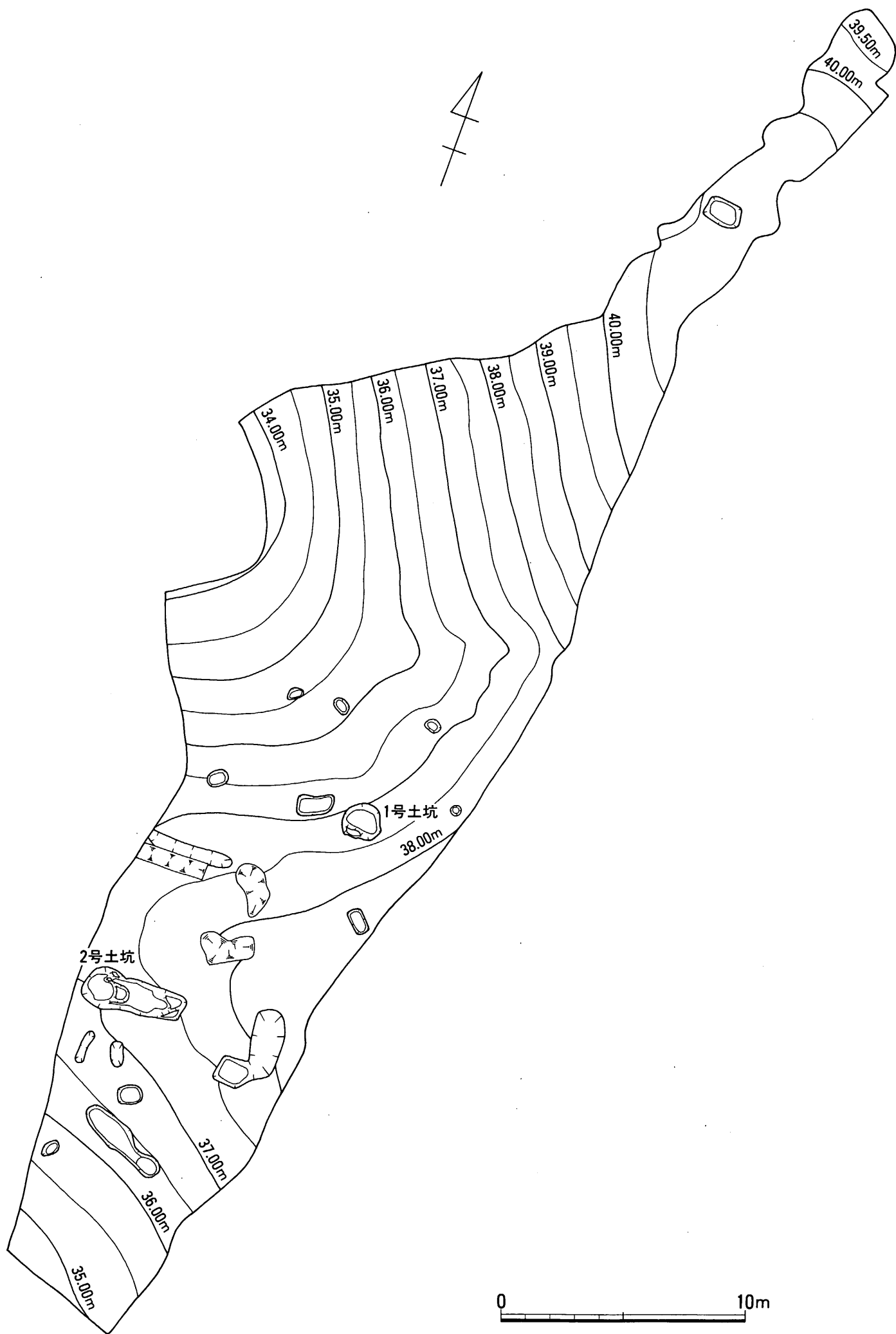


第20図 池田遺跡遺構配置図（1/200）



第21図 池田遺跡盛土状遺構土層断面図（1/60）

- | | | |
|-----------------------|-------------------------|--------------------|
| 第1層 褐色土層（白色粘土粒混入） | 第15層 明褐色土層（緑灰色・黄褐色粘土混入） | 第29層 黒色土層 |
| 第2層 明褐色土層 | 第16層 褐色土層（緑灰色土混入） | 第30層 灰オリーブ色土層 |
| 第3層 緑灰色土層 | 第17層 におい黄褐色土層（白色粘土粒混入） | 第31層 灰色土層 |
| 第4層 褐色土層（白色・黄褐色粘土粒混入） | 第18層 黒色土層 | 第32層 黄褐色土層 |
| 第5層 黒色土層 | 第19層 明褐色土層（白色・灰色粘土混入） | 第33層 黄褐色土層 |
| 第6層 におい赤褐色土層（白色粘土混入） | 第20層 明褐色土層（白色・灰色粘土混入） | 第34層 灰色土層 |
| 第7層 緑灰色土層 | 第21層 におい黄褐色土層（固い砂質土） | 第35層 オリーブ灰色土層 |
| 第8層 赤褐色土層（白色粘土粒混入） | 第22層 黄褐色土層（固い砂質土） | 第36層 オリーブ灰色土層 |
| 第9層 黄灰色土層（褐色土粒混入） | 第23層 褐色土層（白色粘土粒・炭化物混入） | 第37層 におい黄褐色土層 |
| 第10層 褐灰色土層 | 第24層 オリーブ褐色土層（緑灰色粘土混入） | 第38層 黒褐色土層（灰色粘土混入） |
| 第11層 灰黄褐色土層（白色粘土混入） | 第25層 褐色土層 | 第39層 灰色土層 |
| 第12層 黒色土層 | 第26層 明褐色土層 | 第40層 崩落のため不明 |
| 第13層 黒色土層 | 第27層 黒褐色土層 | 第41層 崩落のため不明 |
| 第14層 黒色土層 | 第28層 褐色土層 | K 攪乱 |



第22図 池ノ上遺跡遺構配図 (1/200)

を観察した。その結果、土は前記の青灰色砂層の上面から積まれており、大きく見ると6層に分けられることがわかった。積み方は特に緻密と言う程ではないが、全体的に粘質でしまりは良い。検出状況からすでに削平を受けていると思われたが、最も残存状況の良い部分で青灰色砂層の上面からの高さは130cm弱を測った。南側の端部から約11mの部分に幅5.8m、深さ1.2m程の断面がV字形を呈する溝があり、これによって盛土が二分されるような状態になっている。この溝の最深部は青灰色砂層に及んでおり、また南側の立ち上がりを補修した痕跡が認められた。調査の最終段階においてこの溝を重機で掘ってみたが、何も出土しなかった。遺物は、盛土の検出面に貼りつくような状態で須恵器が1点のみ出土した。

出土遺物（第25図、図版20）

須恵器

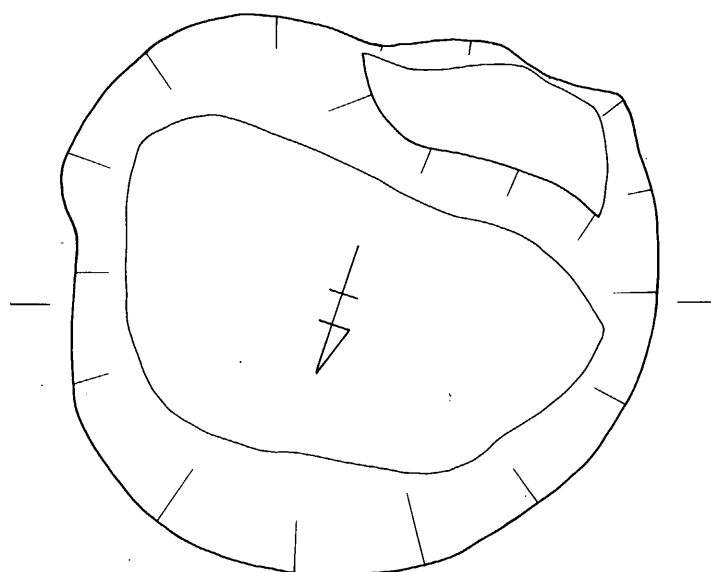
杯蓋 全体の3分の1程度の破片で、復元口径13.4cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリを行う。天井部内面には灰をかぶっており、重ね焼きの痕跡も認められる。低く扁平なつまみを持ち、口縁端部の折り返しは明瞭である。

1-（2）池ノ上遺跡の検出遺構と遺物

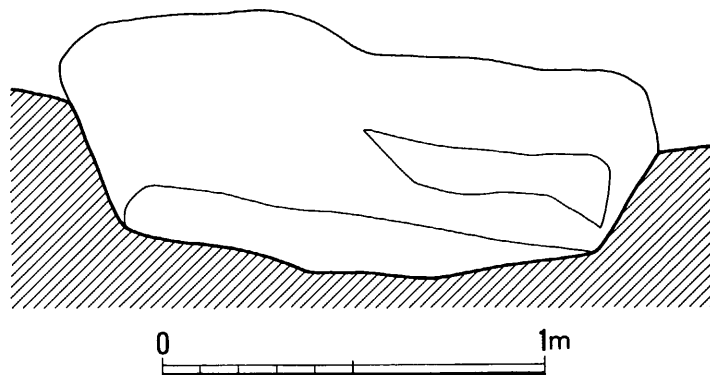
池ノ上遺跡は大野城市大字上大利481-4に所在し、調査面積は約520㎡である。地形的には北東から南西へ傾斜する小丘陵であり、標高は約34m～41mを測る。検出された遺構は土坑2基と若干のピットであり、そのほとんどが調査区の南半部で検出された。これについては、丘陵全体がすでに削平を受けており、本来調査区の北半部にあった遺構がすでに消滅していた可能性もある。

1号土坑（第23図、図版19-（1））

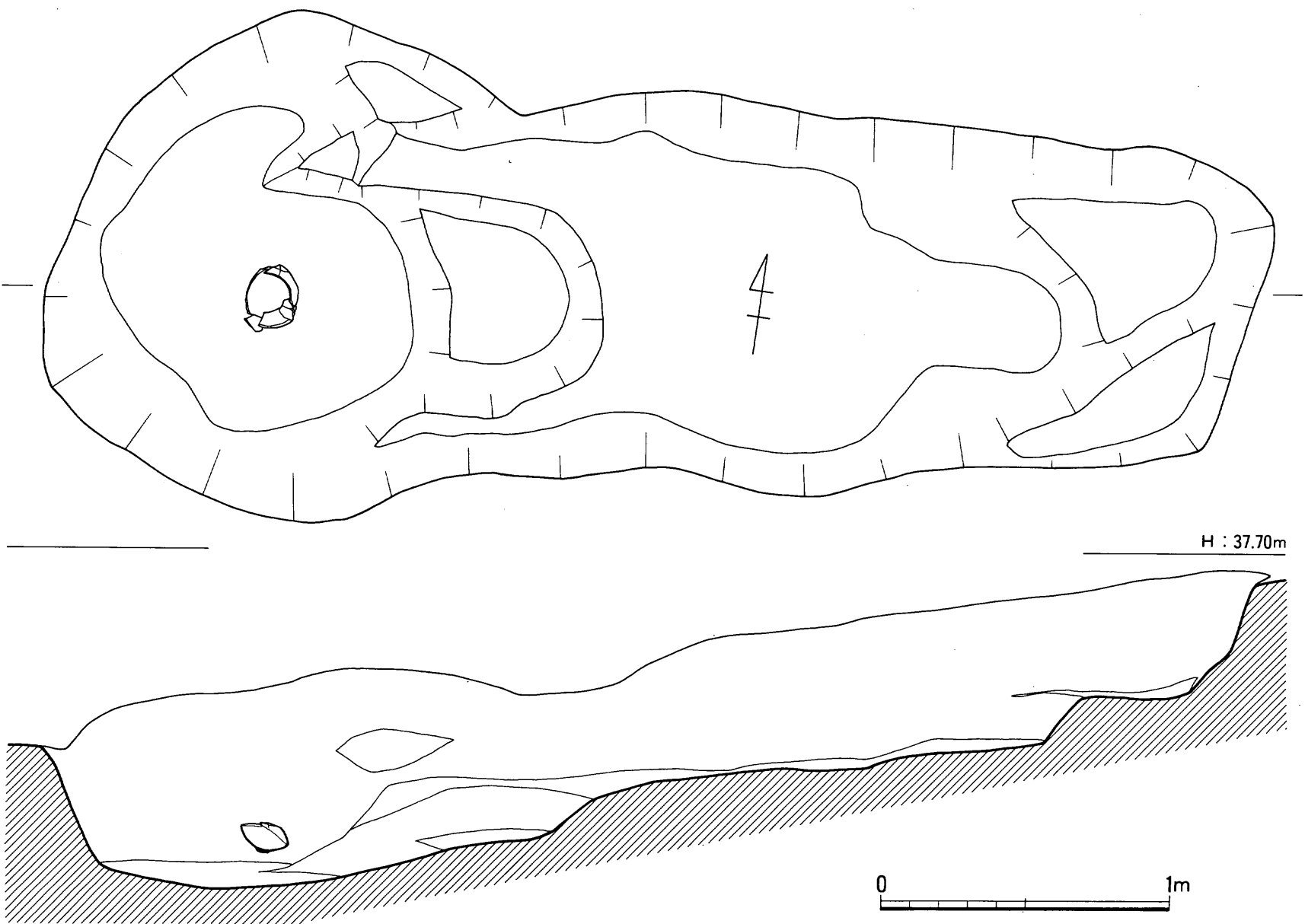
調査区の中央部よりもやや南寄り、標高37.00m～37.40mにかけての箇所で検出された。平面形は南側がややつぶれたような円形を呈し、上端長軸長159cm、短軸長151cmを測る。壁の立ち上がりは60°～70°と急で



H : 37.50m



第23図 池ノ上遺跡1号土坑実測図（1/20）



第24図 池ノ上遺跡2号土坑実測図(1/20)

ある。床面は遺構の中心部にむかって緩やかに傾斜しており、最も深い部分で68cmを測る。南側の壁でテラスが検出された他には、壁面・床面でピット等は検出されなかった。遺物は、埋土中より弥生土器が出土した。

出土遺物（第26図、図版20）

弥生土器

壺（1） 口縁部を2分の1ほど欠くが、ほぼ完形である。口径（図上復元）12.1cm、器高16.1cm、胴部最大径19.2cm、底径4.5cmを測る。頸部に断面三角形の突帯を貼付し、ヨコナデで調整する。頸部内面および外面全面に横方向のミガキ、頸部外面に縦方向の暗文状のミガキを施す。胴部内面には指頭状の圧痕が見られる。胎土には微細な金雲母および砂粒を含む。

2号土坑（第24図、図版19-(2)）

1号土坑よりも約11m南、調査区の西端近くで検出された。標高は37.00m～37.70mほどである。東西方向に長い長方形の、西端部を丸くふくらませたような平面形を呈する。規模は上端長軸長425cm、短軸長130cmである。壁の立ち上がりは50°～60°で、1号土坑ほどではないものの、やはり急である。床面は段を持ちながら全体としては東から西へ深くなっており、最も深い部分で67cmを測る。壁でテラスが検出された他には、壁面・床面でピット等は検出されなかった。

遺物は埋土中より弥生土器が出土した。

出土遺物（第26図、図版20）

弥生土器

壺（2） 口縁部を全く欠いているが、打ち欠いた可能性もある。器高（残存高）14.3cm、胴部最大径21.4cm、底径5.2cmを測る。胴部に断面三角形の突帯を貼付し、ヨコナデで調整する。調整は風化が進み内外面とも不明であるが、外面にはミガキの痕跡がかすかに残る。胎土には微細な金雲母および砂粒を含む。

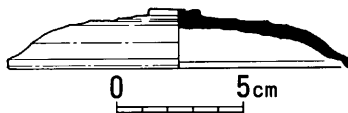
III. まとめ

1. 各遺構の年代について

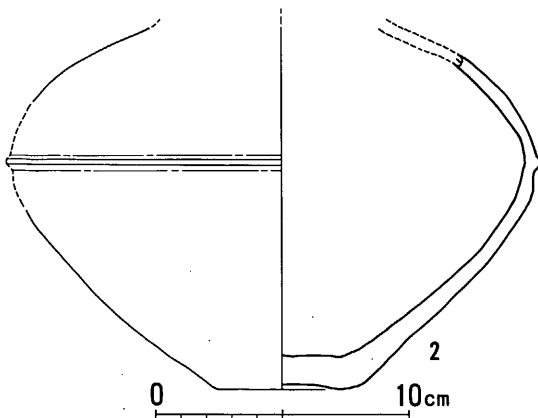
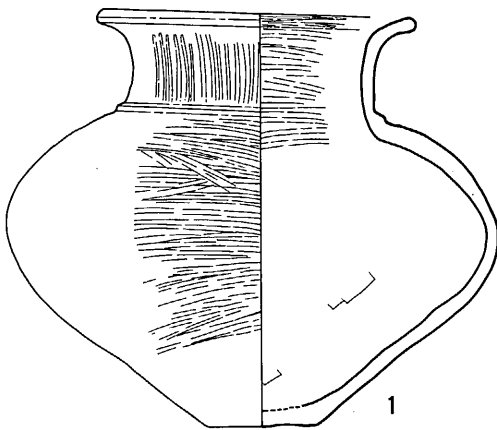
(1) 池田遺跡

盛土状遺構

出土遺物は第25図に示した須恵器杯蓋のみである。この杯蓋自体は、8世紀前半のものである。しかし、すでに削平を受けていた盛土の検出面から出土したもので、この遺物が盛土の築造の時期



第25図 池田遺跡出土遺物実測図（1/3）



第26図 池ノ上遺跡出土遺物実測図（1/3）

に直接関係するかどうかについては疑問が残る。

(1) 池ノ上遺跡

1号土坑

第26図1に示した壺は弥生時代中期前葉に属するもので、1号土坑についてもこの時期と考えられる。

2号土坑

第26図2に示した壺は第26図1のものより若干新しい特徴を示し、弥生時代中期前葉から中期中葉のものと考えられる。したがって2号土坑の時期は弥生時代中期前葉から中期中葉である。

2. 各遺跡の性格について

(1) 池田遺跡

調査面積が約500㎡にすぎず、盛土状遺構についても限定された調査にとどまったため、以下はかなり大胆な推測となるが、過去の周辺の調査結果を参考にその性格について考えてみたい。

前述のように盛土状遺構は絶えず湧水する低湿地に造られており、南東から北西方向へのびている。その振れ幅はN-55°-Wである。本遺構を北西方向に延長すると、その先には九州大学筑紫地区キャンパスのある丘陵がある。また、南東方向に延長した先には大野城市立大利中学校のある丘陵がある。このような位置的関係にある盛土の性格については、

①丘陵間の連絡（道路的性格）

②丘陵間の谷部の遮断（小水城の性格）

の2通りが考えられる。

盛土状遺構のN-55°-Wという振れ幅は、現在までに池田遺跡周辺で検出されている、官道と推定される道路状遺構の振れ幅とほぼ同じである。また、本遺構をさらに北西および南東方向に延長したラインは、現在想定されている官道ライン^{〈註1〉}にのってくる。一方現在の地形を観察する限りでは、まさにこの場所にN-55°-Wという振れ幅で小水城的な盛土を築造して谷部を遮断する蓋然性は看取されない。したがって盛土状遺構については、低湿地を土橋状に渡る道路的性格をもつものであり、かつ官道の一部であると考えておきたい。

また、盛土を二分するように掘られた溝については、最深部が青灰色砂層にまで及んでいることから暗渠等の設置のためのものかとも考えたが、溝の中からは遺物・遺構ともに検出されなかった。この深さまで掘り下げればおそらく湧水したことが考えられ、南側の立ち上がりの補修はそれによるものの可能性があるが、溝の性格については不明とせざるをえなかった。

以上、遺構の時期が明らかでない状況下ではあくまでも推測であり可能性があるというにすぎないが、池田遺跡で検出された盛土状遺構の性格について考察してみた。

(2) 池ノ上遺跡

1号土坑・2号土坑ともにプランが不整形であるため、土坑墓とはしなかった。2号土坑出土の壺が口頸部を打ち欠いたものだとすれば、何らかの祭祀的性格を考えることができる。いずれにしても土坑2基のみの調査結果から遺跡の性格を論ずるのは困難である。幸いなことに本遺跡に隣接する九州大学筑紫地区遺跡群の調査結果では、この地域においては弥生時代中期以降遺構と遺物が

増加し、ある程度の集落が営まれていたことが明らかにされている。池ノ上遺跡の調査結果もこれに矛盾するものではない。^{〈註3〉}

〈註1〉 山村信榮「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68号 1993

〈註2〉 第2図参照

〈註3〉 九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室『九州大学埋蔵文化財調査報告（第三冊）』1994

版 图

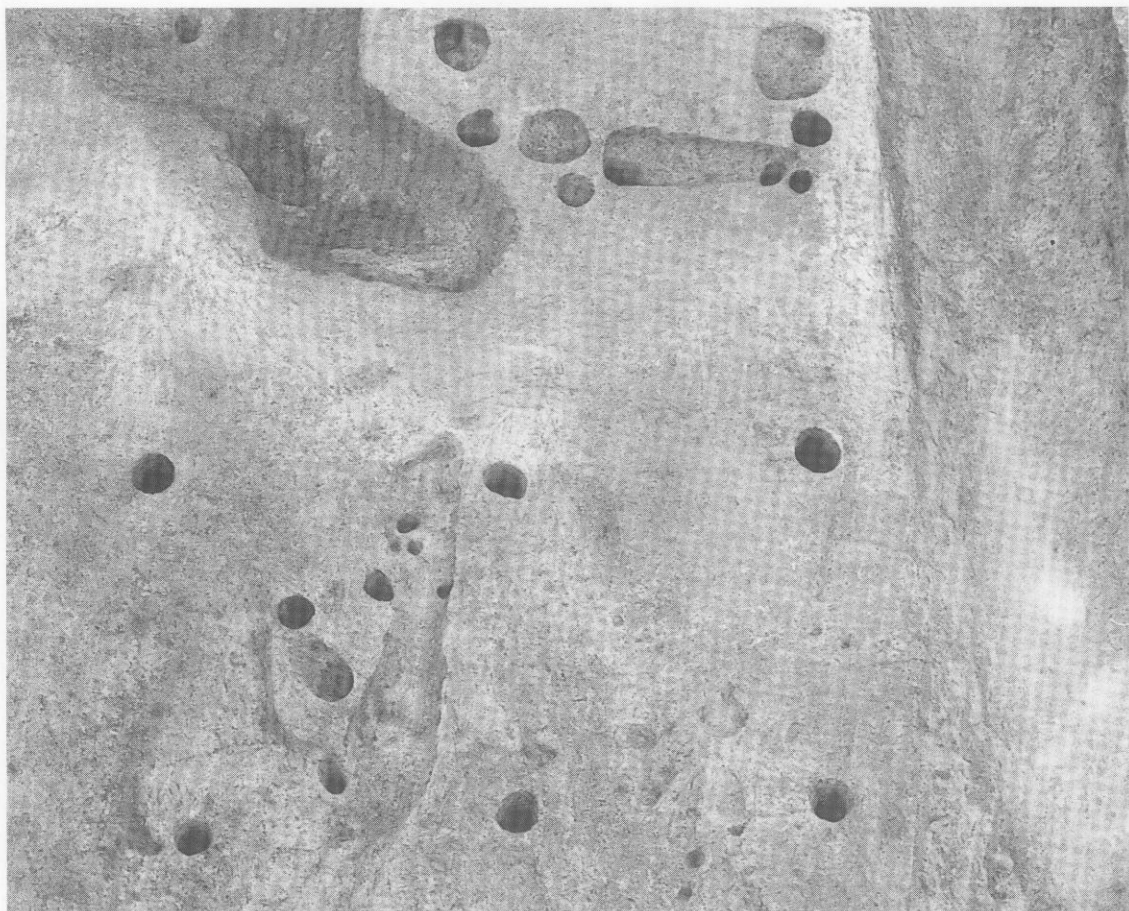
谷川遺跡



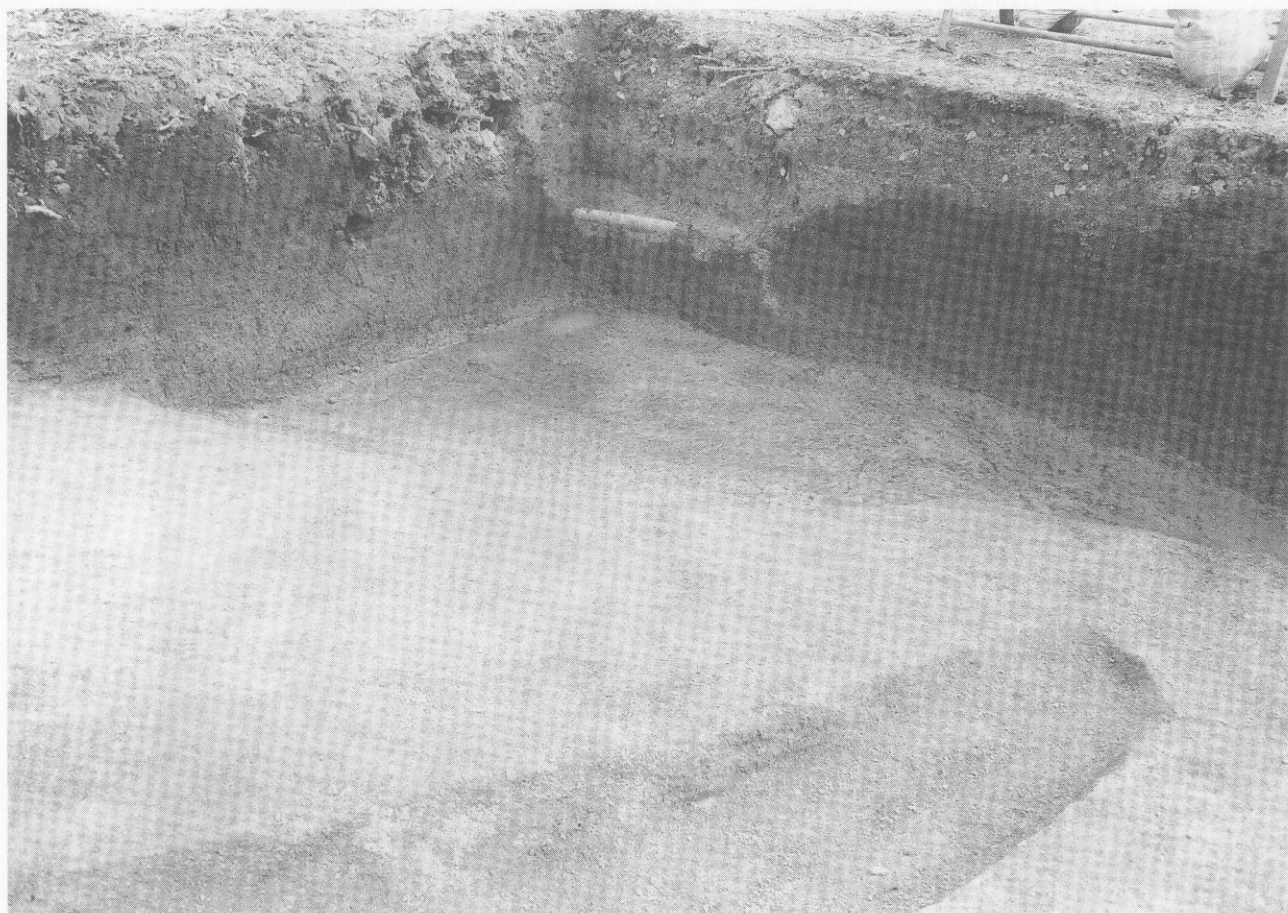
(1) 谷川遺跡調査地全景（南東から）



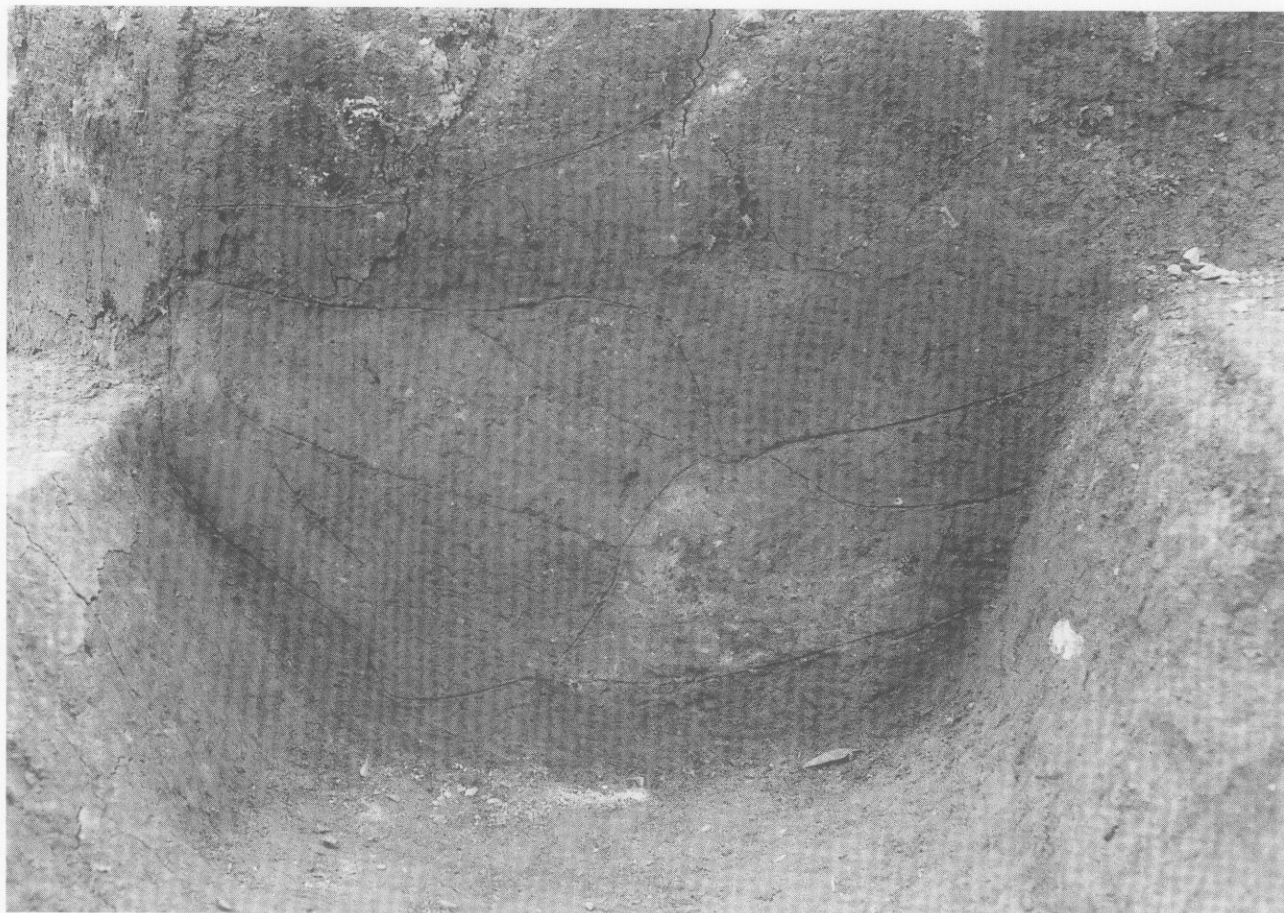
(2) 谷川遺跡調査地東半部（南東から）



(1) 谷川遺跡SB01 (南東から)



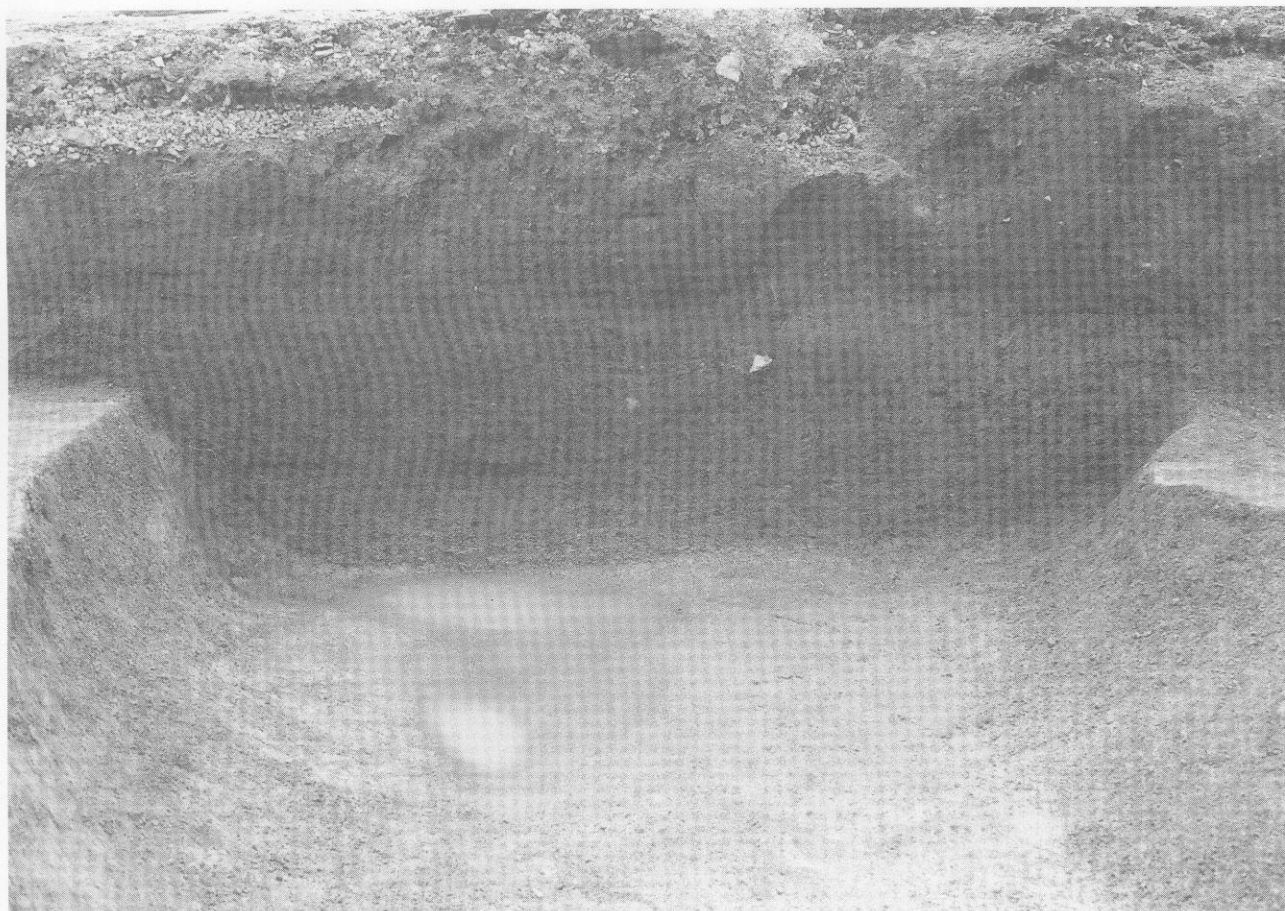
(2) 谷川遺跡SX02 (西から)



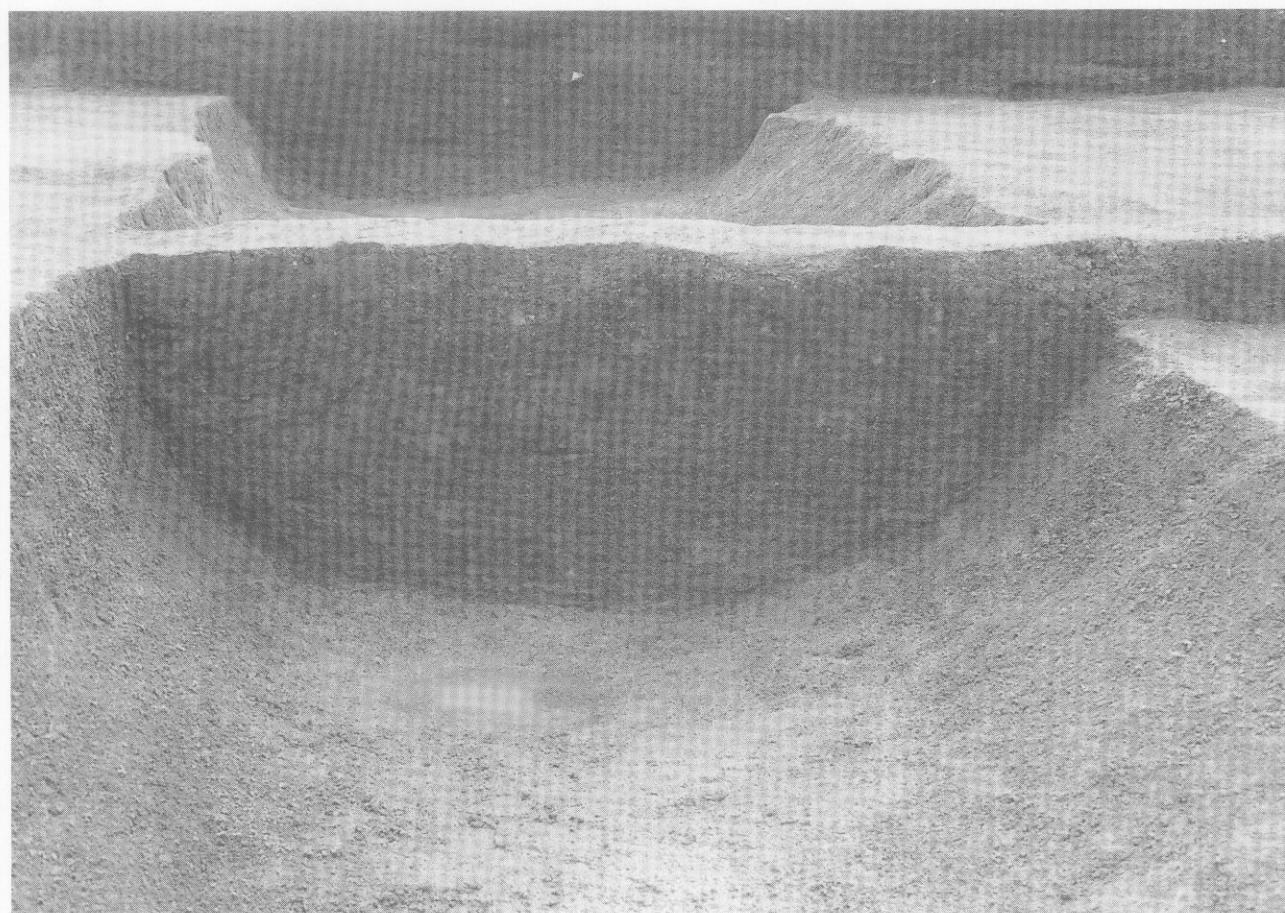
(1) 谷川遺跡SD01埋土断面（北西から）



(2) 谷川遺跡SD02埋土断面（北西から）



(1) 谷川遺跡SD03埋土断面（北西から）



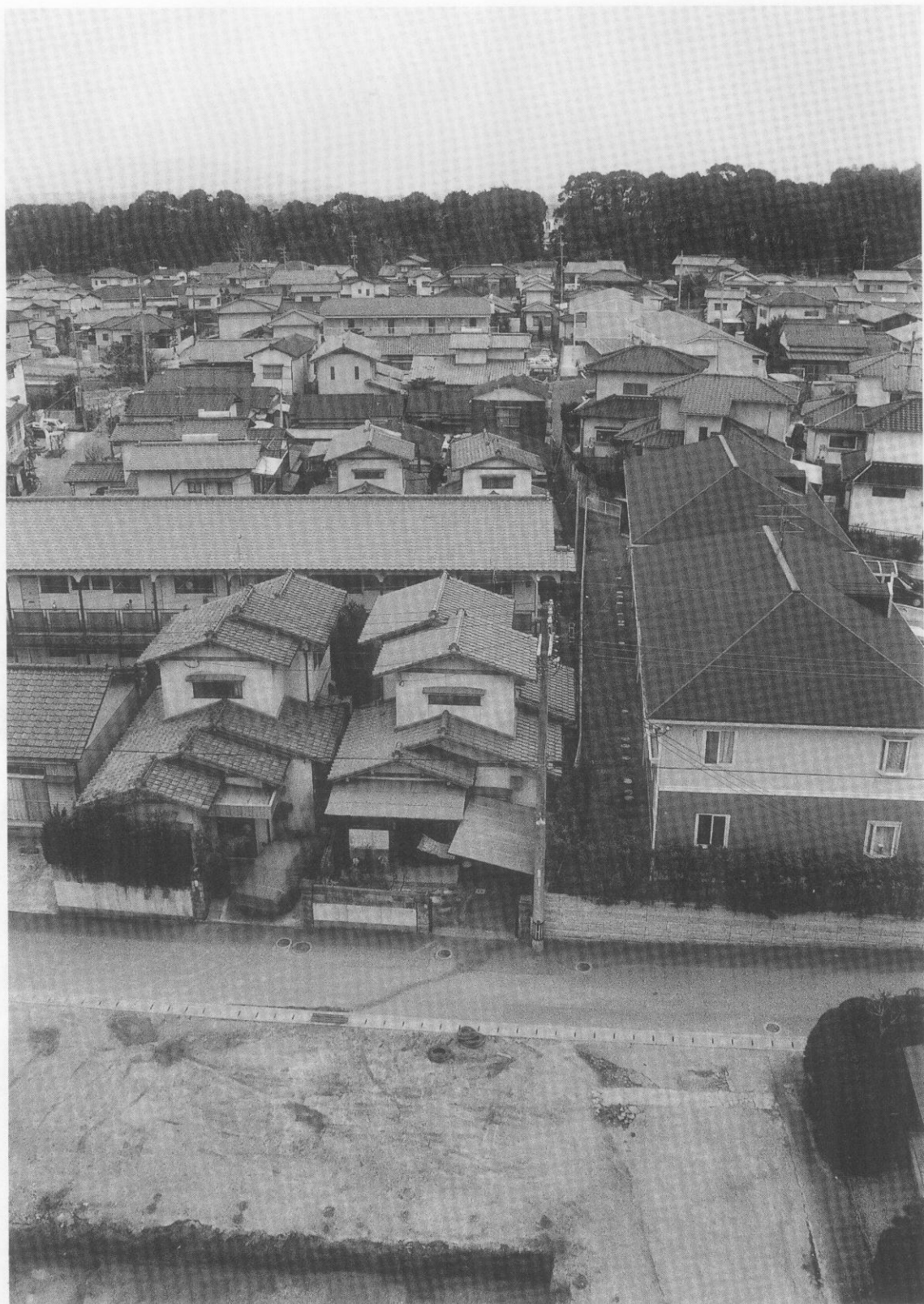
(2) 谷川遺物SD03埋土断面（北西から）



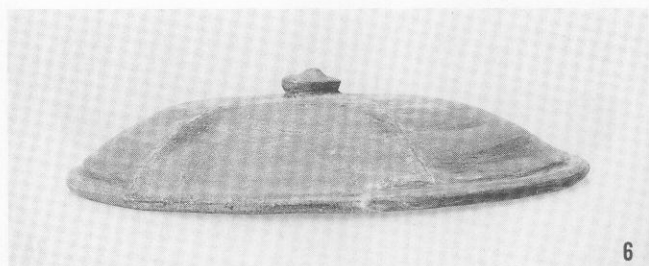
(1) 谷川遺跡SD03埋土断面（南東から）



(2) 谷川遺跡SD04埋土断面（南東から）



谷川遺跡から見た水城跡（北西から）



6



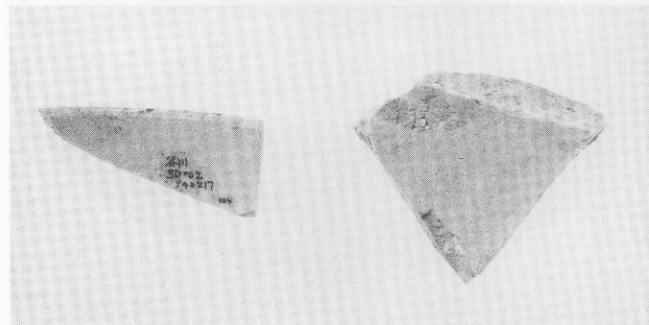
14



9



15



10



16



10



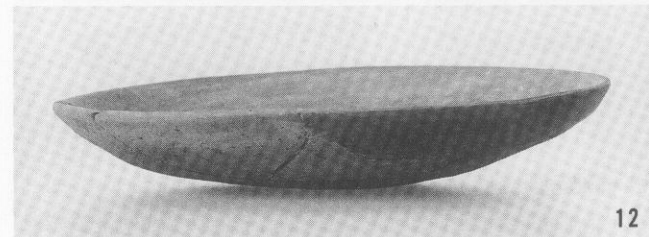
17



11



18



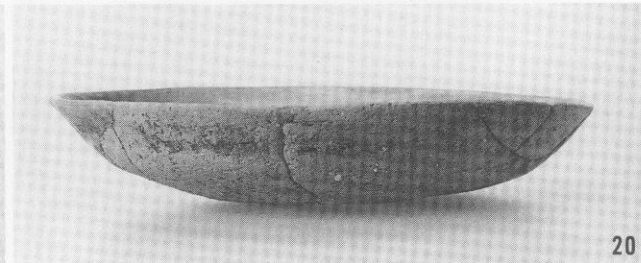
12



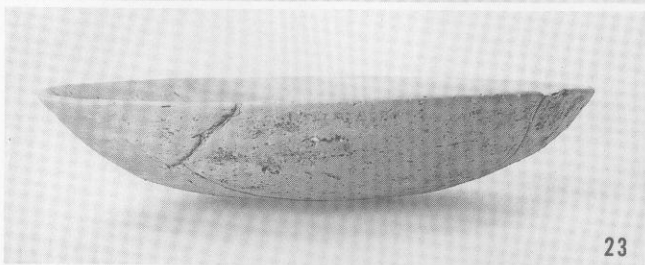
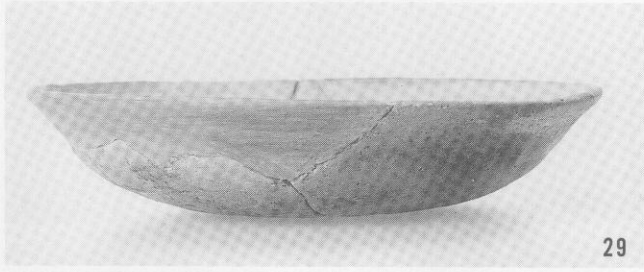
19



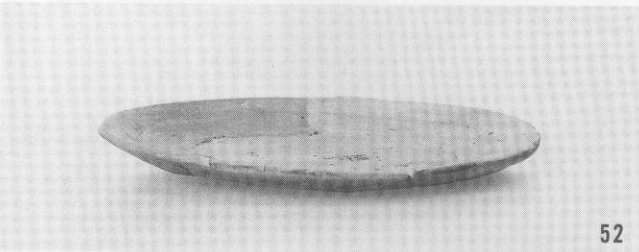
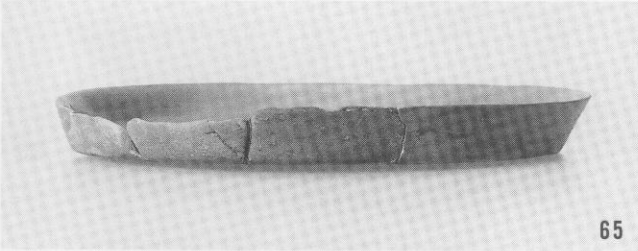
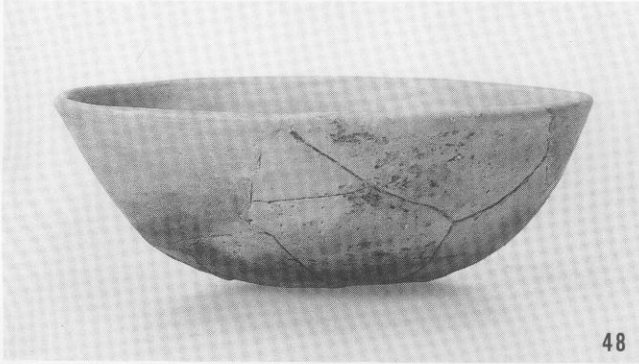
13



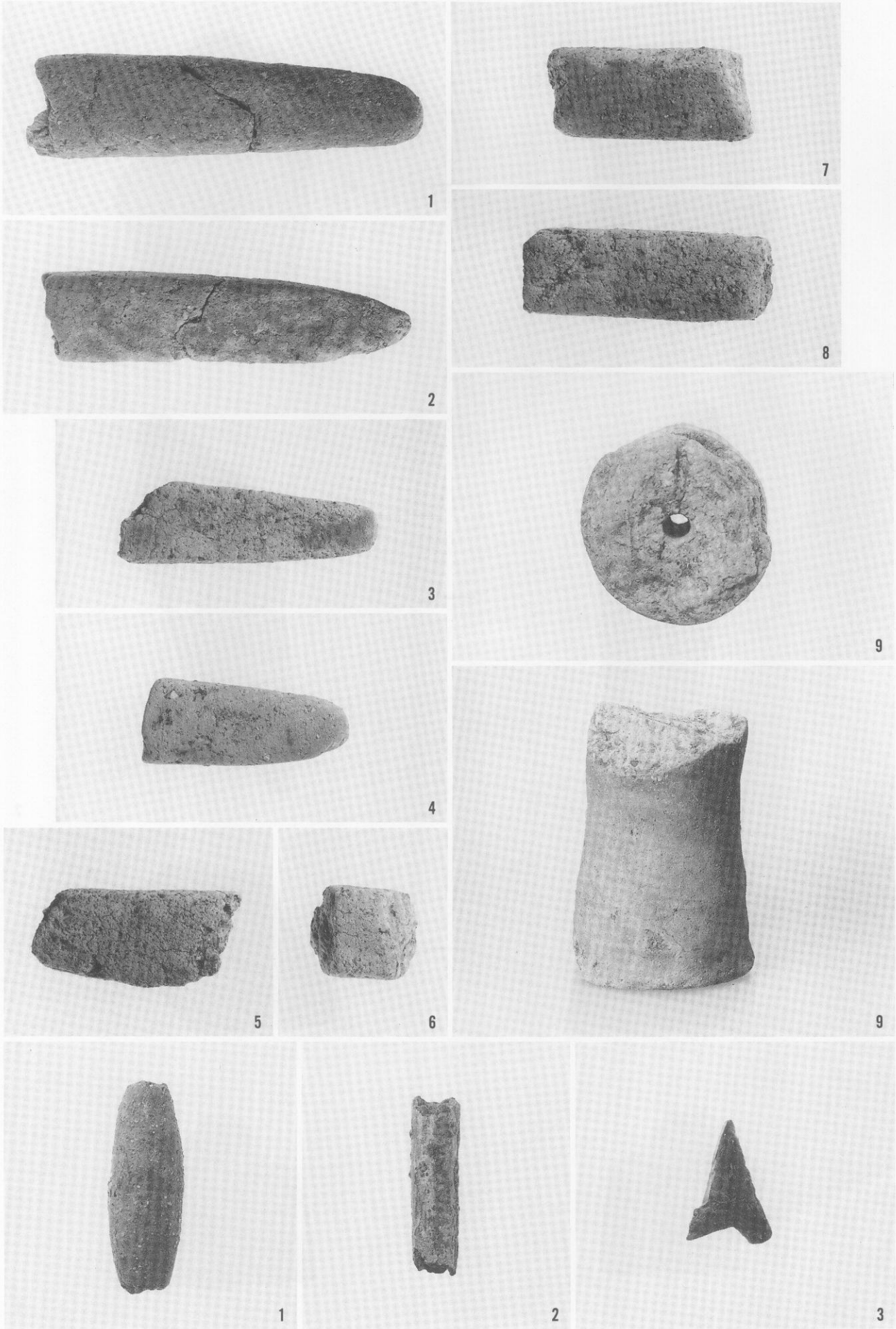
20



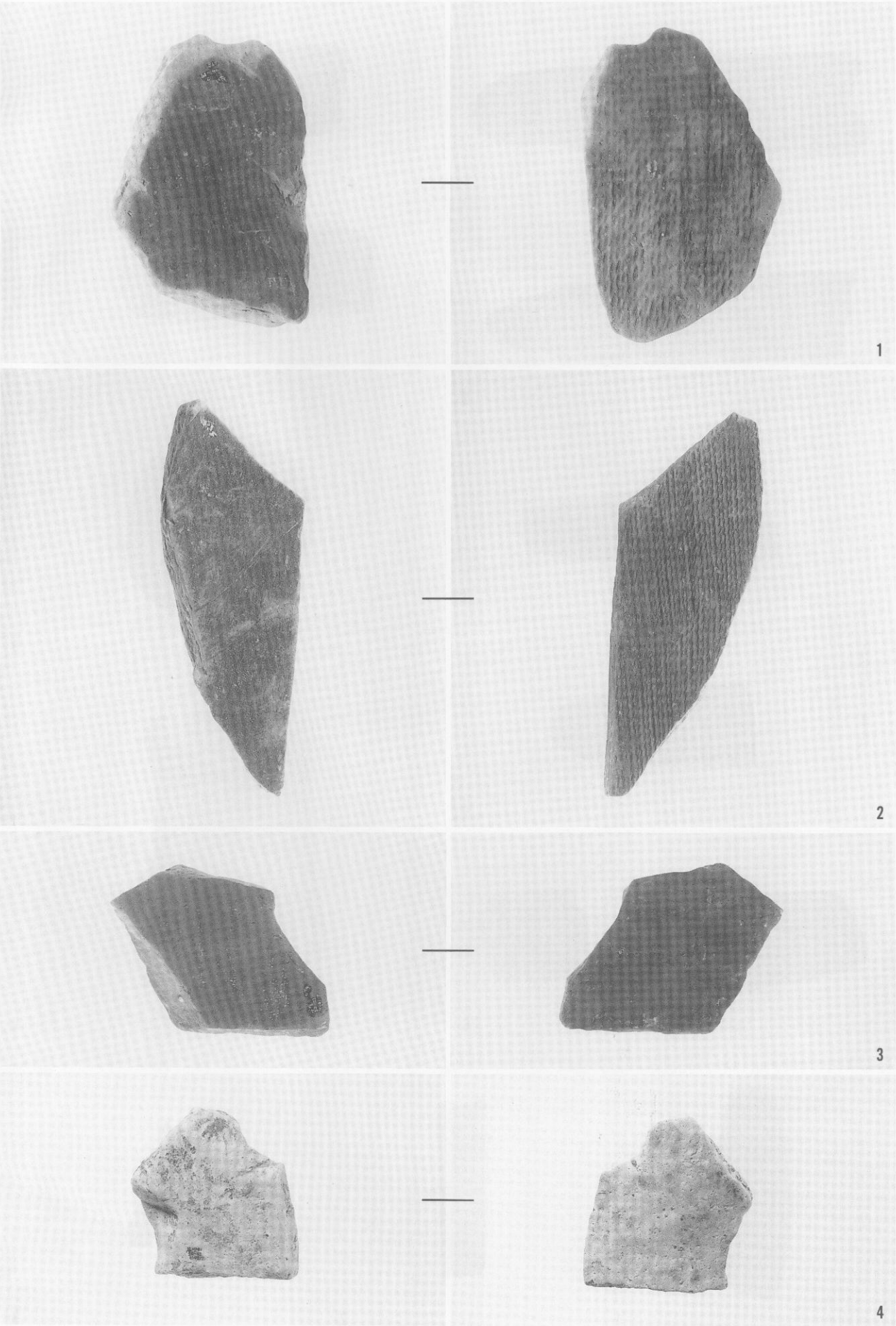




谷川遺跡出土遺物（土器）

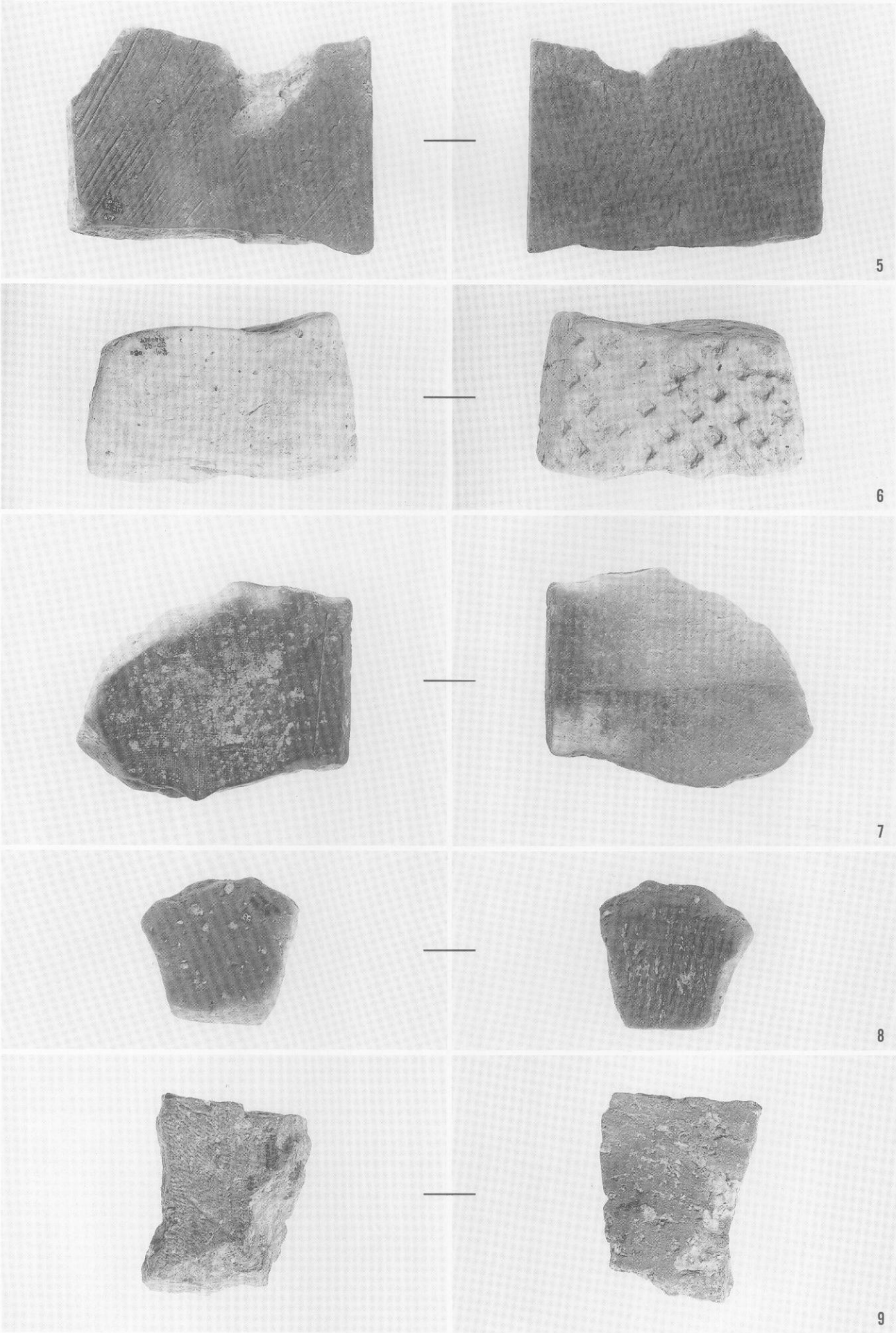


谷川遺跡出土遺物（土製品・石器・金属器）



谷川遺跡出土遺物（瓦）

（複製・展示・記録）伊賀土山歴史資料館



谷川遺跡出土遺物（瓦）

池田・池ノ上遺跡



(1) 池田遺跡全景（北西から）



(2) 池田遺跡盛土状遺構検出状況



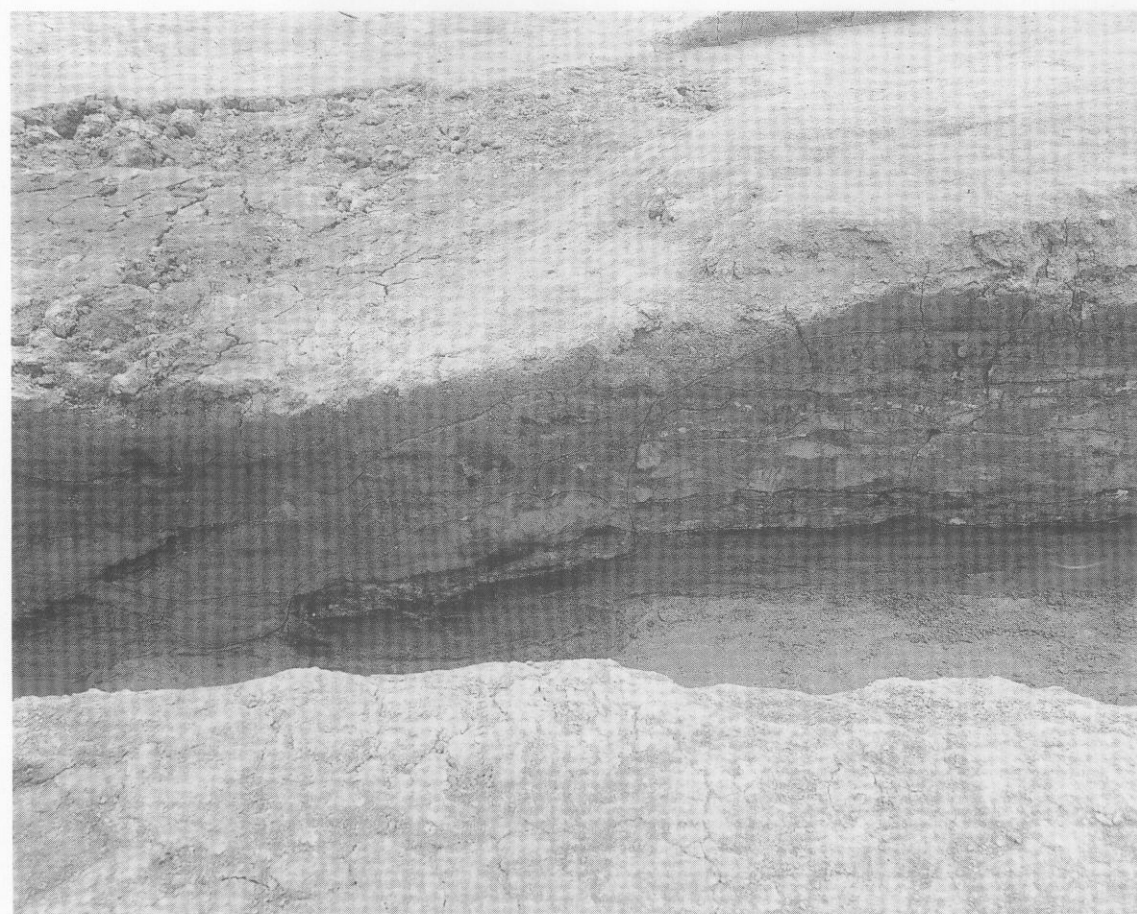
(1) 池田遺跡盛土状遺構土層断面



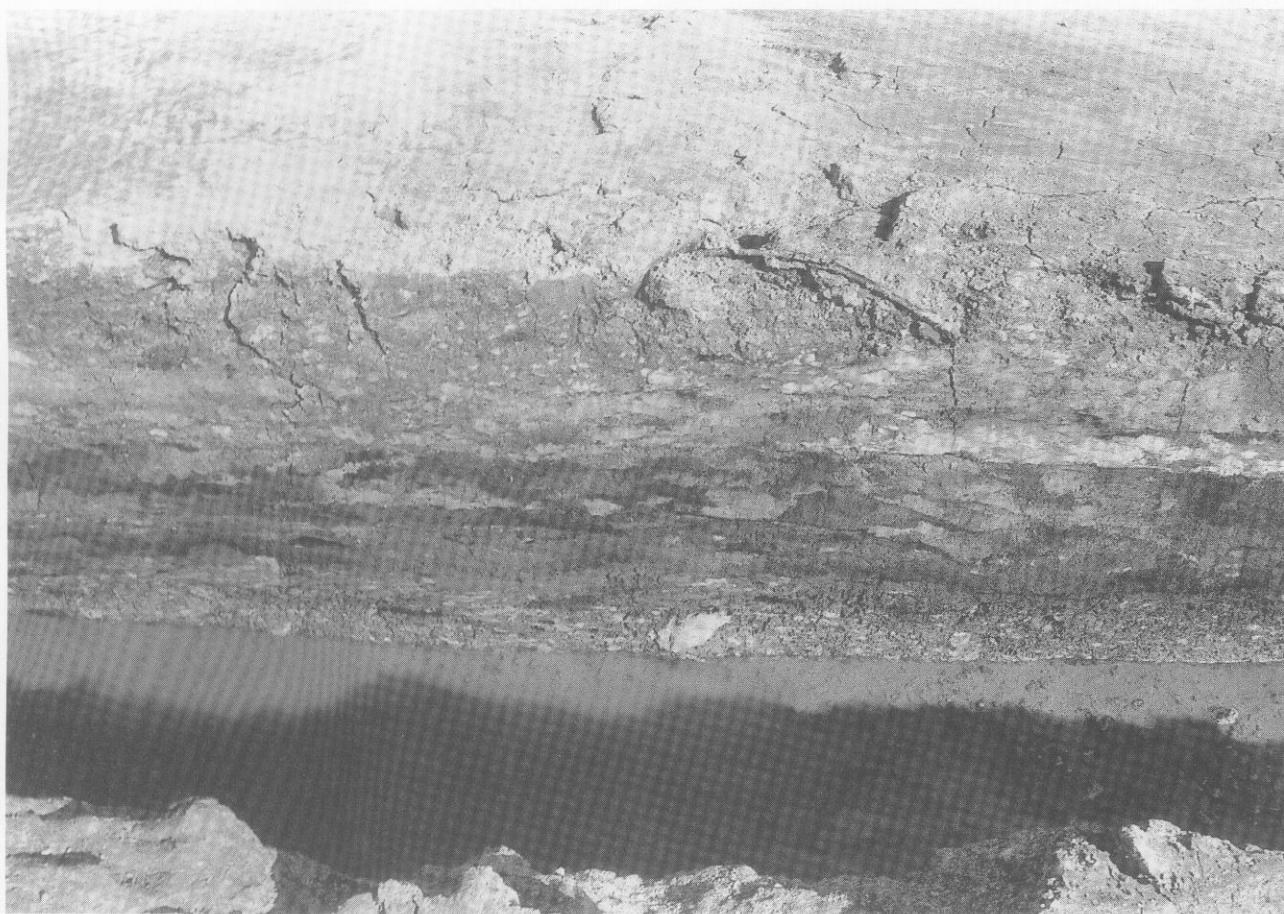
(2) 池田遺跡盛土状遺構土層断面



(1) 池田遺跡盛土状遺構土層断面



(2) 池田遺跡盛土状遺構土層断面



(1) 池田遺跡盛土状遺構土層断面



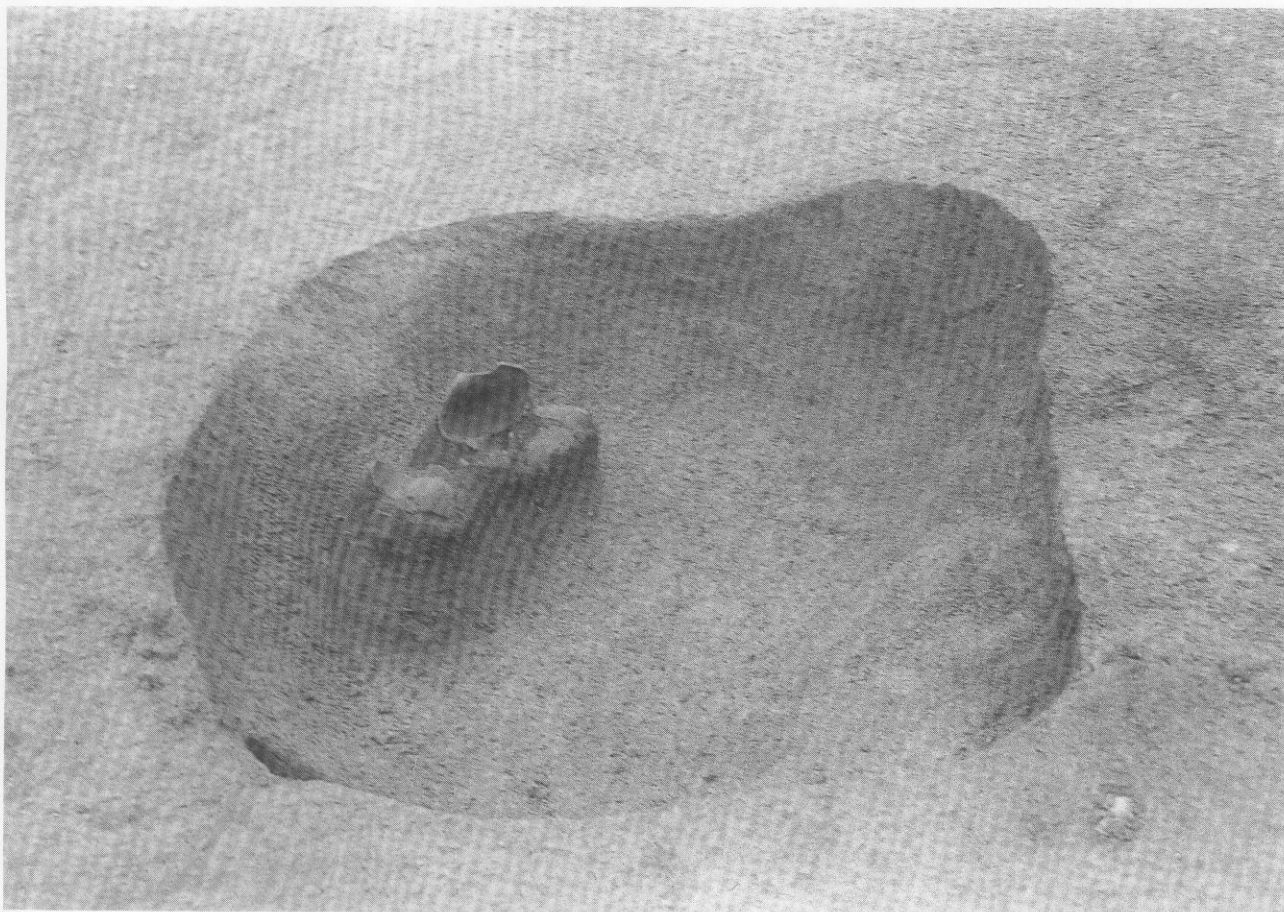
(2) 池田遺跡盛土状遺構土層断面



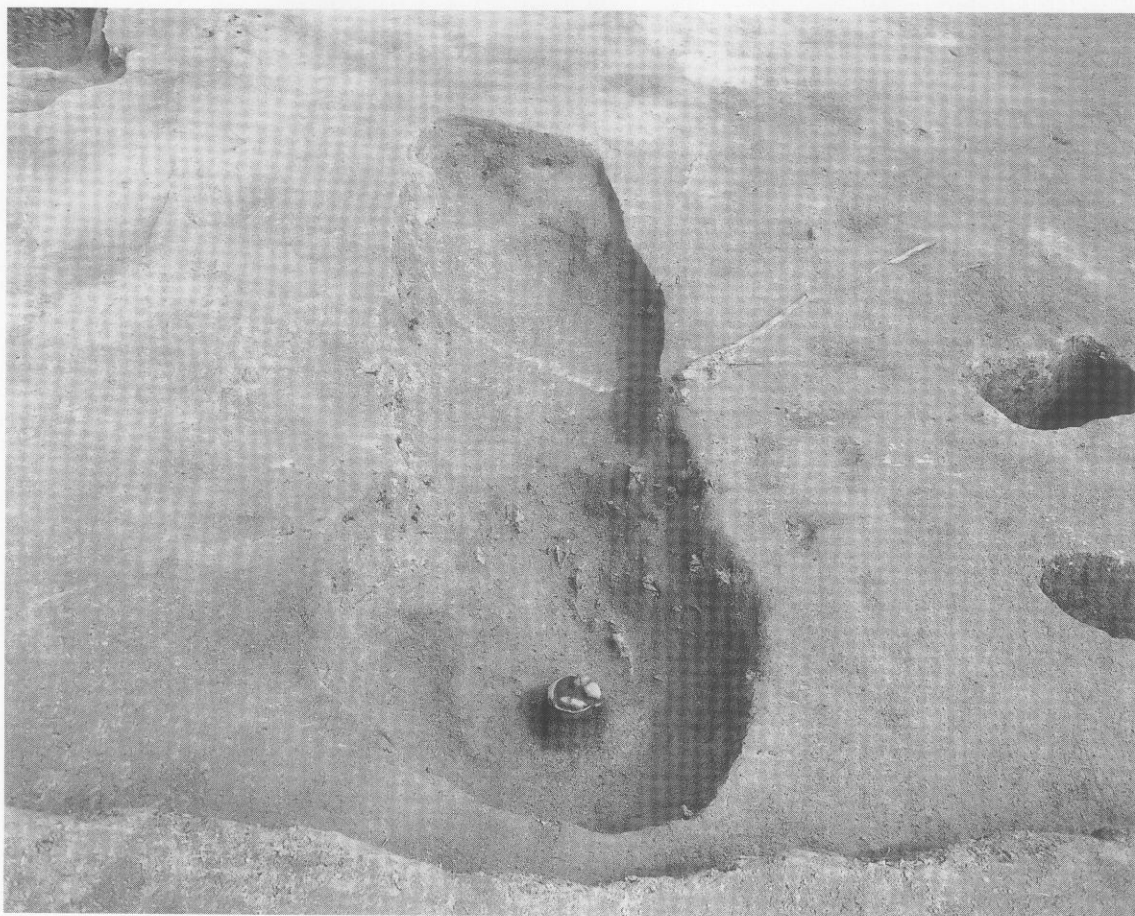
(1) 池田遺跡盛土状遺構土層断面



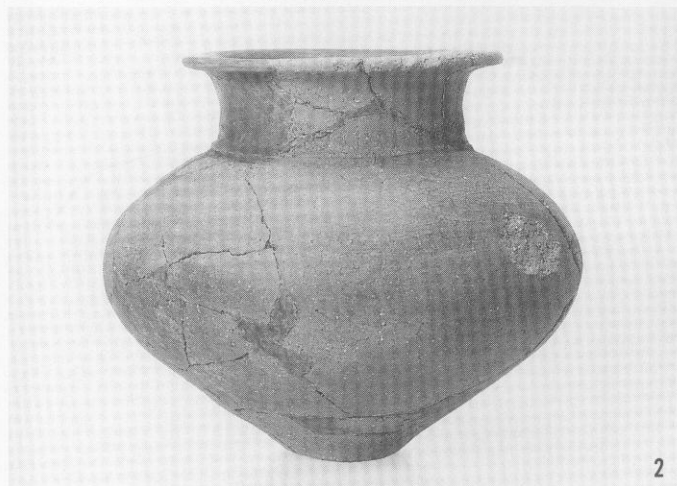
(2) 池ノ上遺跡全景（南西から）



(1) 池ノ上遺跡 1号土坑



(2) 池ノ上遺跡 2号土坑



池田・池ノ上遺跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たにがわ・いけだ・いけのうえいせき							
書 名	谷川・池田・池ノ上遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	大野城市文化財報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第51集							
編 著 者 名	舟山 良一、徳本 洋一							
編 集 機 関	大野城市教育委員会							
所 在 地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 TEL092-501-2211							
発 行 年 月 日	西暦 1998年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たにがわ いせき 谷川遺跡	福岡県 大野城市 下大利			33° 30' 51"	130° 29' 17"	1994.1.31 1994.3. 7	約400㎡	マンション 建設
いけだ いせき 池田遺跡	福岡県 大野城市 上大利			33° 31' 07"	130° 28' 42"	1990.1.29 1990.3.26	約500㎡	街路築造
いけのうえいせき 池ノ上遺跡	福岡県 大野城市 上大利			33° 31' 02"	130° 28' 56"	1990.1.29 1990.3.26	約520㎡	街路築造
所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
谷川遺跡	集落 官道	弥生時代 奈良時代 平安時代	ピット 官道(溝) 溝	弥 生 土 器 土 師 器 須 恵 器 陶 磁 器				
池田遺跡	官道	奈良時代	官道(盛土)	須 恵 器				
池ノ上遺跡	墓地	弥生時代	土坑	弥 生 土 器				

大野城市文化財調査報告書

第 51 集

平成10年 3 月31日

発 行 大 野 城 市 教 育 委 員 会
福岡県大野城市曙町2丁目2-1

印 刷 株式会社 チューエツ福岡工場
福岡県博多区東比恵2-9-1